婦人運動

7月號

第7卷 第6號

職業婦人社發行

昭和四年六月二十八日印刷納本 同四年七月一日發行 第七卷第六號

婦人運動 目次

時評

勞働黨内閣と失業對策……山川菊枝（六）
英國總選擧と婦人……赤松明子（一四）
支那問題に就て……千原楠藏（九）
瓦斯爭議と無産婦人……佐久間晉（一五）

創作

かくて時代を（短篇）（誰が誰を殴つたか！）……葵イツ子（一八）
妻（短篇）……並木琴子（六三）
ムツイリー（飜譯）……レールモントフ 丸山秀平（七二）
◇生田花世さんの「燃ゆる頭」を讀みて……吉田信子（四三）
◇婦人運動」の前號批評……島崎百合乃（四六）
◈組合立學校を觀て……奥むめお（五八）
◈竹内女醫の危難に就て……

▼國際婦人の運絡……金子じげり（二八）
歌 夏來れば……池田みわ子（三二）
詩 わかい日本の女……生田春月（四六）
詩 悲しき母……竹内てるよ（一七）

◇職業婦人第二の自覺……堀江かどえ（三八）
◇省線電車雜感……村内彌榮（四〇）
◇職業遭難記……林芙美子（三二）
生活の中から

▼買物心得帳……承榮友次郎（五四）
▼夏になる頃……高橋せつ子（五五）
▼友に呼びかける……西しげ子（五七）

この頃の私……奥むめお（七）
世を動かす力……池田みわ子（一六）

編輯後記

レーニン未亡人……（三一）
家庭の働きと保健……（二八）
益々ふえる失業者……（二九）

新劇紹介
◆新劇はどう動くか……編輯部（49）
◆「ブブス先生」……築地小劇場（50）
◆「飛ぶ唄」……新築地劇場（52）

正しく知る事は正しく行ふ事だ！

7月

長谷川時雨氏・神近市子氏・今井邦子氏序

生田花世小説集

（四月上旬發賣）

燃ゆる頭

私は『女子文壇』『靑踏』『ビアトリス』『處女地』『ウーマンカーレント』『苦草』『女人藝術』等の寄稿家として今日まで歩いて來ました。この間約二十年長短とり交ぜて二十六篇の小説を今こゝに上梓することが出來るやうになりました。何といふのろい歩みであつたことでせう。（著者言）

内容一斑

群衆と母子・灯ともし頃の會話・繼子・羽子板をかゝへて・燃ゆる頭・ある秋の夕のこと・獅子は抗しがたし・三角關係の一端より・除夜・櫻の町・小松原・凪鈴・父母への書・南方の桃源郷・不勉強同盟

東京市小石川區大塚上町十五　中西書房　振替七二〇五番

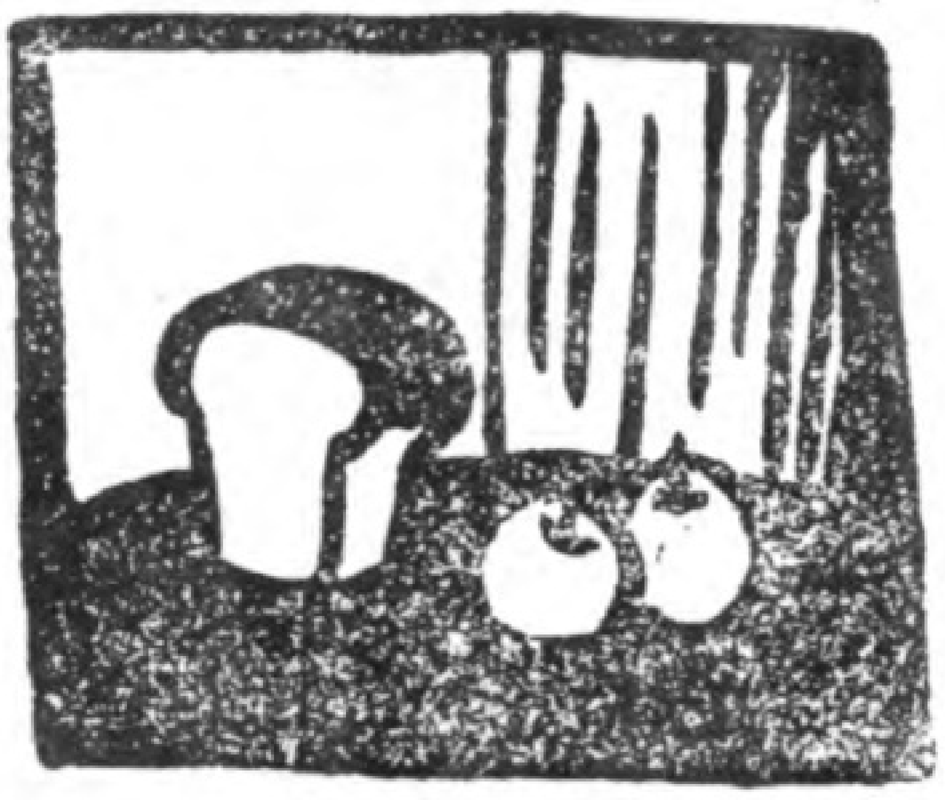
婦人運動

第七卷　七月號

現在の社會が
どんな風に出來てゐて
それが私達の生活に
どんな風に働きかけてゐるのか
それをしつかり見極めやう

私達は今
歴史的にどんな位置を與へられ
どんな使命をもつて
立たなければならないのか
それをはつきりと知り盡そう





勞働黨內閣と失業對策

山川菊枝

失業問題は、大戰後、資本主義列强を惱ましてゐる最も深刻な病患の一つである。アメリカは世界の金の半分を藏してゐるといふその繁榮の眞只中で五百萬人の失業者を有し、英國も又二百萬人の失業者を有してゐる。日本の場合には正確な調査も統計もないので、失業者の數は判明しないが、頭腦勞働者と筋肉勞働者とを通じて莫大の量に達し、社會的脅威となつて來てゐるが、これに對する組織的な對策は、一向講ぜられようともせず、失業者は本人の心掛が惡いのだといふような、無責任な放言でごまかされてゐる有樣である。

英國における第二次勞働黨內閣の成立は、總選擧の中心スローガンが失業問題にあり、內閣存立の意義がこゝに係つてゐるだけに、特にその失業對策について內外の注意を集めてゐる。

最近における英國失業者の增加は、他國と同樣、例の產業合理化の結果である。一九二七年末、英國の資本家團體が、ボルドウィン內閣の尻押によつて、勞働指導者との間に行つた謂ゆる產業平和の協定は、產業平和、即ち資本家的產業の安定のために、勞資の正面衝突を回避し、兩階級の指導者の協定によつて平和のうちに、紛爭の解決を期し

たものであつた。この協定によつて、勞働階級は、その權利を獲得する唯一の武器たる階級鬪爭を放棄し、資本家の誠意に頼ることを餘儀なくされた。謂ゆる經營上の合理化は、資本家にとつての合理化であり、謂ゆる冗費節減は、資本家にとつての冗費節減であつて、勞働者には、時間延長、賃銀低下、失業增加、以外、何ものをも齎らさなかつた。そして『產業平和』とは、かゝる合理化運動に對する、勞働階級の抗議權の放棄を意味したのである。

であるから英國勞働者の今日の狀態に對しては、保守黨內閣は勿論であるが、『產業平和』のために協力した勞働黨首領の責任も最も重大であるとして、左翼の攻擊の砲火が集中されてゐる。即ち勞働黨は、勞働階級をブルジョアジーに賣り渡すものであり、その揭ぐるところの勞働者解放の政策は、實質上一種の瞞着政策にすぎないといふのが、左翼、特に共產黨あたりの批評である。

ところで問題の失業對策について、勞働黨はどういふ具體的な案を持ち合せてゐるか。

勞働黨の失業對策は三つの部分から成り立つてゐる。その第一は、經濟復興による財政の充實で、これがためには道路、疏水の起工、海岸侵蝕の防止、森林開拓等。第二は老少年者を勞働市場より引退せしめること。即ち滿十四歲までの義務教育年齡を十五歲まで延長し、生活費補助をなすこと、かつ六十五歲以上（必要に應じて六十歲以上）の男女に十分な恩給を與へて、職業の競爭場裡より退くことを可能にすること。第三には、海外移住の奬勵である。更に失業手當の增加も企てられ、特に婦人の失業者に對しては、これに女中奉公を强要せざること、男女に對して一層十分なる技術教育の普及をも綱領の中に加へてゐる。次に一週四十八時間制の實施、坑夫の七時間勞働の復活、石炭鑛山及び運輸產業（鐵道をも含む）、燃料及び電力の國有が、重要な政策となつてゐる。

全ての產業的企業の統制と監督とのためには、特殊の經濟委員會（謂ゆる經濟參謀本部）が設置せられ、マクドナ

ルド首相みづからその委員長たらんとするものである。かゝる産業統制委員會は、戰時中には珍しからぬことであつたが、勞働黨はこれを、戰爭のためでなく、平和のために興して、資本家の自由競爭を防止し、經濟的復活を期しようとしてゐるものだといはれてゐる。

是等の諸政策のうち、移民政策は、左翼から最も攻擊されたところであつた。資本主義の存在するところ、必然に失業者の大軍が生ずる。英本國を食ひつめた失業者が、政府から切詰めた旅費と手當とを貰つてカナダやオーストラリアへ出かけても、そこにはそこで既に失業者が山なして居り、英國からの失業者の襲來によつて、土着の勞働者の失業苦はます／＼增大し、英國からの半年も三月もうろついた揚句、單に土着勞働者の地盤を荒したゞけで空しく本國に引返すのが例である。金のうなつてゐる米國でさへ失業者の仕末に窮してゐる矢先、どこをどう探したところで失業者のパラダイスは見つからない。然るに海外移住をもつて移民解決策と解するのは、勞働黨の瞞着策の最惡なるものとして左翼の攻擊をうけてゐる。

保守黨の大資本家擁護、帝國主義的政策に苦しみぬいた英國民は、勞働黨の公約する社會政策に望みをつないで、今日の如き總選擧の結果を示した。しかし勞働黨內閣の出現が株式市場を混亂させないのは、それが根本的に英國の社會組織を變革するやうな意義をもつものでないからのことで、畢竟勞働黨內閣の出現によつて、資本主義は危機に瀕せぬのみか、一層の安定を加へる望みさへないではないことを知つてゐるからである。

階級鬪爭を否定する勞資協調內閣の出現！　世界無產階級は、この內閣にその最大限度の能力を發揮せしめることにより、勞資協調主義の限度をも知ることができるわけである。



支那問題の諸相

千原楠藏

歐洲大戰後世界の檜舞台は太平洋に移り、今や世界列强は太平洋問題を中心として、外交戰の火花を散らして居ります。申すまでもなく、太平洋問題の中心問題は支那問題でありますから、支那は東洋のバルカンであり、支那問題は世界の癌なりと稱せられて居るのであります。

支那は御承知の通り、全歐洲に匹敵する尨大な領域と、全人類の四分の一を占むる莫大なる人口を持ち、且つ世界獨特の文化を維持しつゝ連綿今日に及ぶ老大國であり、三千年のその歴史は實に複雜を極め、今日まで主權者系統を變更すること二十四回に及んで居ります。而して、今より約十八年前に第一革命が勃發して、從來の帝制から急變して共和制となり、更に昨年の六月舊軍閥首領張作霖を斃し北伐を完成してから、勞農ロシアやムツソリニー下の伊太利と同じく一黨專制即ち國民黨專制時代を出現したのですが、第一革命で滿洲族の淸朝を倒し今日漸く國民革命時代、全國統一時代に入るまでその間十八年といふものは共和制の中華民國とは只名ばかりで、實に群雄割據の封建時代、內亂の連續で、一日として戰爭の絕間なく不統一、不可解な狀態を繰返して來たものであります。尤も支那の歴史から見れば、十八年位の內亂は決して長いものでなく一度天下亂るれば短くて七、八十年、長い時は三、四百年もの亂世が續いて居ります。又支那と云へば支那人の國に相違ないが實は各種民族の寄合世帶で、その主なるものだけでも漢族、滿洲族、蒙古族、回教族、西藏族の五民族あります。支那の五色國旗はこの五族共和を象徵

したものであります。國民革命實現の今日に於ても尚統一難に惱んで居るのはこれに起因してゐます。

しかして近年の內亂は世界的思想の影響を受けて舊軍閥と新軍閥、右派と左派、極右派と共產黨といふ風に何れも極端な主張を看板として相爭ふのであるから、愈々複雜を極めて居ります。先年のワシントン會議に於て、列國使臣が大いに支那問題を討議したが遂に解らなくなり、フランス外相ブリアンが「支那とは何ぞや」といふ奇問を發したことは今も尚有名な話であります、で支那問題の厄介なことは、先づ第一に支那の正體が解らないこと、第二に正體の解らないこの支那を廻つて列國の利害關係が蜘蛛の巢の樣に縱橫に張り散らされ錯綜して居ることであります。

戰爭の無い時は世界は頗る太平、無事に見えますが、それは外交上から見れば各列國の利害關係が調節されて居ることであり、勢力の均衡卽ちバランスが取れて居るといふことであり、軍事的には次の戰爭への準備時代といふことになるのであります。今や、列國の利害關係が支那に集中され、尖銳的な外交戰が支那問題を中心として演ぜられて居るといふことは、若し支那において列國の利害關係に破綻を生ずれば直ちに世界戰爭となる危險があるといふことに外なりません。

斯く如く支那問題は複雜、多端にして且つ世界的の大問題でありますから、支那に於て他の如何なる國よりも利害關係の多い我が日本として、支那問題の重要なることはいふまでもありません。明治大正を通じ日本が國命を賭して戰つた兩三回の大戰爭は全くこの支那問題に起因して居ります。我國に取り支那問題は單なる支那一國を相手の問題でなく、世界相手であり、我が外交の中樞、世界政策の根幹であり、日本の存亡に關する重大問題であります。

然らば支那と日本とは如何なる緊密な關係にあるか。それには抽象的な說明では今日の日支關係を盡すことが出來ないから是非とも政治的經濟的關係から見ることが必要であります。政治的見地よりすれば支那に外國の勢力が根を張るといふことは日本に取り重大問題であり又頗る危險なことであります。

例へば嘗てロシヤが滿洲に努力を扶殖し、此處に東洋經營の根據地を作つた爲、日本は存立を脅かされ、敢然起つてロシヤに宣戰し、ロシヤを滿洲から驅逐したのもこれが爲めで

あります。又最近の例はロシアのボロヂン、ガロン等が四五年前から本國の命を受け、廣東に於て國民革命軍を指導し、支那の赤化を企てました。若し支那が赤化すれば日本の支配階級が好ましからぬ影響を蒙る事は實に重大でありますので我政府は、非常に之を重大視するのであります。ロシヤに限らず、支那に如何なる外國の勢力が加はるとも、直接に我國に重大影響をもたらすのであります。

更に經濟的には又密接不離の關係にあり、益々緊密の度を加へつゝあります。支那の領土は日本の二十七倍もありその資源たるや世界的であります、それで日本のブルヂョアは斯う考へます。日本は資源に乏しいから、日本の人口、食糧問題の解決は多分にこの支那の資源に依らなければならない。殊に工業の原料は支那の資源開發に依ることが最も近道である。そしてその製品は支那四億の大衆に販賣して日支が有無相通ずるの經濟的原則を最も能率的に發輝する必要に迫られて居るのであると。

日本の對支投資十八億圓、在支邦人二十數萬は主としてこの大使命の遂行に活動しつゝあるのでありますが、更に貿易について概觀すれば日本の對外貿易總額四十二億圓（昭和二年）の内、對支貿易は約二割八億圓を占めて居り米國に次ぐ第二の貿易國であります。對米貿易は寧ろ輸入超過であつてこの對支貿易に依つてのみ我資本家は多額の輸出超過の受取勘定を得て居るのであります。で彼等にとつて對支貿易の地位の重大なることは勿論であります。更に支那に於ける權利利益の内、彼等として最も重大視する滿洲のそれについて概觀すれば、所謂日支關係の緊密なることは一層判然すると思ひます、日本は目下滿洲に於て日露戰役にロシヤから繼承した鐵道、鑛山並に經營二十餘年の投資及びそれに伴ふ約二十萬の在留民と約百萬の朝鮮人の深い關係を持つて居ります滿鐵の如きは一朝大陸有事の際は直に軍事的の「國防線」であり、約十億噸の撫順の石炭、五十五億噸の油母、頁岩に含まるゝ三億餘萬噸の石油、鞍山の一億噸の鐵鑛の如き、將來の工業國日本の重要な基礎原料であり、非常時の必需品であります。日本資本主義は之等の政治的經濟的權益を日本の勢力範圍に確つかり把握して置かなければ自活存立の目算も立たねば、將來の發展も期し得られないといふ重要な關係にあります。

ところがこの重大な支那問題の主體であるところの支那が最近それ自體において一大變革を起しました。即ち國民革命軍が舊軍閥を打倒して國民政府なるものを南京に組織し、國民黨專制の時代が出現しました。從來の軍閥は何等の主義主張もなく天下の權勢を爭はんがために內亂を事としてゐたのであるが、國民黨は政治的の主義、主張を持つて立つて居ります。同黨は故總理孫文の三民主義並に建國方略を尊重し之に依つて一切の政治革命、社會革命を遂成せんとするものであるが、今日の全盛時代を來したのは大正十二年頃共產黨を合流せしめて以來のことであります。これより勞農ロシヤの組織制度を採用し、聯露(ロシヤ)、聯共(共產黨)、農工(小作人、勞働者)の三大政策を着々實行し曰く打倒舊閥官僚、曰く打倒封建社會、曰く打倒土豪劣紳、曰く建設廉潔政府、曰く打倒帝國主義、曰く不平等條約廢棄、曰く關稅自主權回復、曰く治外法權撤廢等々の急進的なスローガンを掲げて內外に向つて更始一新を企てたのであります。支那民衆は長い間軍閥の蹂躪に苦しめられ、又列强の壓迫を受けてゐたため此等のスローガン並に政策は非常に民心を刺戟し現在南京政府主席蔣介石が國民革命軍總司令に就任して北伐に着手するや僅か半年足らずに吳佩孚、孫傳芳等の舊軍閥巨頭を苦もなく破り、昨年の六月の第二次北伐戰で張作霖軍を破つて、支那四百餘州を青天白日旗下に統一したのであります。

そして現在の如き五院制度の國民政府を組織しました。その外交政策は飽くまでも急進的なもので、支那から外國の勢力を一掃して、列國の束縛から脫せんとして居ります。兎に角國民政府は支那を代表する唯一の政府であり、人民の意思を代表してゐる譯でありますから、列國としても事實上之を承認せざるを得ない局面となりました。然し、之をおいそれと承認出來ない理由が列國にあります。夫々支那に持つてゐる權益は理由あつて條約上に確保されたものでありますから、若し列國が同等の利害關係に置かれて居るならば、一致協力して支那に當ることも出來るが、利害關係が各々非常に異つて居ります。例へば米國の如き、支那に何等權益を持たず、貿易が出來、商品さへ賣込めばよいと云ふ國と、日本政府の言の如く「自國の存亡に關し、又滿洲の權益の如き、之が獲得に二十億の國幣と數萬の生靈の血を以つてしたもの」との間には大きな差異があります、又英國の如き八十年間の

長きに亘つて持つてゐるものを今直に返還することは事實上不可能であります。斯る場合米國の如き利害關係の少い國は支那の主張を多分に容認し得るから、支那から感謝され、反對に日英の如きは仇敵視され、排日、排英等のボイコット運動を眞正面から食ふことになるのであります。

國際關係といふものは水臭いもので斯る場合には必然的に拔け驅け競爭即ち自分一人がよい子にならうとする外交戰になります。で米國は國民政府が成立するや、眞先に南京事件を解決し、更に關税條約をも締結して同政府に承認を與へました。之を見た英國も續いて同政府を承認すると共に米國より一歩進んで國書を捧呈して正式の承認を斷行したのであります、かくて支那と最も利害關係の多い日本が英國にまんまと出し拔かれたので、輿論は之を田中内閣の失態として痛撃すると共に、濟南事件を早く解決して日支國交を常軌に復せと詰寄つたのであります。日本も後ればせながら漸く最近に至り濟南、南京、漢口の三事件を解決し、近く芳澤公使が國書を捧呈して正式承認を與へる事になり、支那に實際的利益をもたらすように稱して、通商條約を改訂し、不平等條約廢止、關税自主權回復、治外法權撤廢の支那の要求を容れることゝなつたのであります。

現在世界の三大强國は日英米三國である樣に、支那において外交戰の火花を散らすのも又この三國であります、この中米國は支那において擁護する何等重要な權益も持つてゐないから、常に前述の如く日英を出拔いて自由な態度を取り得るので、この米支關係は常に日英を牽制して行くのであります。日英同盟が存在してゐた當時は日英の協調政策は常に支那問題をリードして行けましたがワシントン會議の結果同盟條約が消滅した今日では凡て米國に引づられるの餘儀ない始末であります。米國が先年ワシントン會議を召集して海軍協定並に對支九ケ國條約を成立せしめた魂膽の一半は日英同盟を消滅せしむるにあつたことは明かな事實であります。英國も日英同盟の消滅後は、歐洲問題の關係もあつて米國に追隨主義を取ることになつたから、日本は存亡に關するこの支那問題において常に孤立の地位にあり、英米兩國の間に狹まれ苦境に陷つて居ます。しかも存立と發展を確保せんとする日本政府と打倒帝國主義を標榜して、支那から一切の外國勢力を排除しようとする國民政府との間に（以下六十二頁に續く）

英國總選擧と婦人

赤松明子



○

世界の政治的興味の中心となつてゐた英國の總選擧は勞働黨が第一黨といふ素晴らしい戰績を收めて幕をとぢました。何しろ選擧の向背を決する原動力が、今度はじめて選擧權を得た二十五歳以下二十一歳以上の婦人有權者であつてみれば、彼女等が何黨にその淸き一票を投ずるであらうかは、まるで雲をつかむやうで少しも見當がつかなかつた。しかし骰子は正しく投げられた。そして最後の榮冠は働く者の眞の代表者である勞働黨に與へられた。

從來保守黨が常に優勢な地位を占めてゐたところに於てさへ、勞働黨が見事保守黨候補を蹴散らして勝利を占めた選擧區が可成り澤山あつたことは、即ち新婦人有權者が勞働黨に投票したことを意味するに他ならない。事實新婦人有權者の多くは勞働黨に投票したといはれてゐる。

然らば何故彼女等は勞働黨に投票したのであらうか。

勿論彼女等は、保守黨四年間の施政と第一次勞働黨内閣八ケ月間の施政とを比較し批判してみて、確かに勞働黨内閣の施政の方が國民の利益であることを認識したがために、勞働黨に投票したのである。屢々婦人は、顏の美醜によつて、容姿の善惡によつて、取るに足らぬ感情によつて左右されるであらうと嘲笑されたが、英國の新婦人有權者は見事この嘲笑をはね飛ばし、婦人の政治的進出に正しい一歩を踏み出した。また婦人は保守的傾向が強いから保守黨に投票する傾向が強いといふ常識的假定も根柢から覆された。

しかしこれは英國の婦人が生れながらにして正しい批判力と確かな判斷力とを持つてゐるためではない。かういふやうな頼もしい社會狀態を生み出すまでには、勞働黨の言論文書による階級的教育も大いに具つて力かあるけれども、もつと重要なことは婦人自身の絶えざる努力である。私達はこの點を大いに學ばなければならないと思ふ。毎日食べるお米の値段も砂糖の値段も知らないで、如何にもおうようの積りで得意然としてゐる馬鹿者が少くない日本の現狀である。現在どんな政治が行はれてゐるか、外國ではどんな事が起りつゝあるかを知るよりは、くだらない戀の道行きの記事に、安價な涙を誘ふやうな戀愛小說に、多くの時間を割く有閑婦人が少くない世の中である。私は現在の日本の婦人は單に外形だけモダンマダムを氣取るよりは、もつと内面的に深く考へ直さねばならない危期に立つてゐると思ふ。



○

扨、再び英國に勞働黨内閣が成立したのであるが、その堂々たる陣容の中で特に異彩を放つてゐるのは何といつてもボンドフイールド女史の勞働大臣である。婦人が大臣になつたのは革命ロシアを除いてこれが始めてである。而も大臣としての彼女の地位たるや、四十年間の惡戰苦鬪の結果としてかち得た血と汗との結晶である。

女史は一八七三年貧乏な百姓の家に十一人の子供の末子として呱々の聲をあげた。既にこの時に女史の苦鬪の生活がはじまつた。女史は十三歳で小學校を終ると同時に、直ちに代用教員となつて家計の手助け

をした。其後ロンドンに出て商店員の仕事を探したが、元來あまり風采のあがらない女史はいつも〳〵商店の門口で眞先に斷られてしまつた。街の端から端まで職業を探しながら何の當もなくさまよひ歩く日が幾日も〳〵續いた。しかし遂に或商店に職を得て、十一年間の店員生活がはじめられた。先づ第一に女史は、職業婦人の劣惡な勞働條件に着眼し、これを改善するにはどうしても職業婦人組合を組織しなければならないことを痛感した。かくて女史は婦人店員組合のためにその半生を獻げたのである。其後一八九七年二十六歳にして英國勞働組合會議に唯一の婦人代議員として出席し、婦人のために萬丈の氣を吐いた。越えて一九一〇年婦人の立候補が漸く許されるや、逸早くウルリツチから立候補したが、惜しくも落選した。

しかし一九二三年の總選擧には見事當選し、翌二四年一月第一次勞働黨內閣の成立に當つては英國最初の婦人次官として勞働次官に任命された。その後のことはあまりにもよく知られてゐる。こゝにくど〳〵と年代を繰つて女史の經歷を述べる。必要はないであらう唯だ一つ何にも增して私達の忘れてはならない一事がある。一九二四年の第六回國際勞働總會の時勞働次官であつた女史は政府顧問として出席し、日本に質問ありとして、日本の婦人勞働者殊に紡績女工の勞働條件に就いて烈しい攻擊と辛辣な皮肉を浴せかけ、日本の政府代表及び資本家代表をして顏色なからしめたことがある。その結果日本の紡績女工の劣惡な勞働條件は一躍世界的に勇名を馳せ、日本政府も止むを得ず深夜業廢止の促進に力を致すに至つたといはれてゐる。その功績に對して日本勞働總同盟紡織勞働組合昭和四年度大會は、愈々この七月を期して深夜業が廢止されることになつたので、日本の深夜業廢止のために多大の援助を與へられたボンドフイールド女史に對し、感謝狀を送ることを滿場一致可決したのである。

連續徹夜業の身體におよぼす結果――紡績工女八十一人一週間交代として、一人平均夜業後の體重減量が百七十匁、一週間停止中に減量の回復するゝこが平均六十九匁、殘る百一匁が回復せずに減じたまゝで殘る月方、印刷工場の二百四人は平均減量二百六十四匁、休止中の回復量六十三匁、二百〇一匁は回復しない分、最後の製鐵會社の二百十一人の平均減量は三百十七匁休止中の回復量二百十四匁、殘る百三匁は回復し得ないものそして未回復のまゝでさらに來る深夜業週に新たに失ふ量を加へるとなると、最後は取返しのつかない病弱者になるといふことを數字は物語ります。

悲しき母

竹内てるよ

正しき母であらうと思ふならば
先づ一人の人間であれ

幸に地上に知る我子の胎動、
そのとき私にさゝやきかけたものは
素朴な人間の愛であつた。
ひとしくも生き且つ生存する
われら人類に對する不斷で鈍重なそれ
であつた。

子供の生聲は行進曲
出來ない約束をしやうとする
明日への切望と忍苦の出發
私は吾子の無心なからだを抱き
そこに滿ちあふれた生長の姿をみた。
眞正面から私を打つ純潔でひたむきな
もの
そのけがれなき、むくな人間を
不合理な地上の生活におくことを
どんなに殘念に思ひ又腹立たしく思つ
たことか。

不幸なる今日の母は
目を閉ち、許しを乞ひ
敢て混沌の中に吾子をおき
よし全身をかけてかばふとも
押しよせて來る虚僞と汚れは無盡藏
だ。

おゝ無力で、無智なる今日の母よ！
私は悲慘のどん底に、自らを鞭つまゝ
にした。
涙の洗ふまゝにした。
地上に生命の神祕を殘す他
今日の母には何が出來よう。

第二の出發は私を人間として立たせ
た。

さようなら！　子よ
お前ひとりは何物でもない。
よし苦惱の中に泣き死んでも
小さい憐れみに僞られるな！
今日の母は、
眞の人間を育てる力もなく
なすべき何の仕事もない。

あゝ私は明日の母として
終まで一個の反逆者として
今日の社會に正しい戰ひを戰ふのだ。

さようなら子よ！
私は悲しき母である。

創作

斯くて時代を

葵イツ子

×

朝刊の殘りをまだ大分小脇に持つて、北川は早稻田の終點近くを駈け廻つてゐた。彼は一枚拔き取るとそれをキユツと音を立てゝ細長く折り、右手に持つて投げ込む仕度をしながら道を横切つた。

其時である。鶴卷町の方から二臺の自動車が飛ぶやうに迫つて來て、一瞬間のうちに彼はその二臺の間に挾まれて仕舞つた。足に突き貫くやうな激しい痛みが來た。全身は崩れるやうに地に落ちた。少し行き過ぎた自働車が停つて、運轉手が降りて來た。「申譯がありません、どうかこの車に……」

といふ聲、北川には顏を見る元氣もない。その男が抱き起して車の中に運び込んで寢させる間、爲すに任せてゐた。

「少し辛棒してゐて下さい、本當に濟みませんでした」

と言ひ置いて、出て行つた。車の外に人が集つて來たらしい。「どうした」「轢いたんだらう」「死んだのぢやないか」などゝ言ふのが聞こへる。寢たまゝで眼を開けて見ると窓のところで幾つもの顏が覗き込んでゐる。

エンヂンの音が響き出した。忽ち非常な速力を出したものとみへて、北川のからだは轉がされさうに動搖する。靜かにやつてくれぬかと言ひたかつた。だが、その元氣すら失つてゐるでは無いか！　波のやうな動搖に足の痛みは一ゝ新しく倍加する。

いつの間にかすつかり靜かに走るやうになつた。あゝさうだ、あの群衆の眼から早く逃げたかつたのだらう！

然し、いつまでも車は走つてゐる。何處とも判らぬが、醫者なれば、こんなに長い間走らせなくても方々にある筈である。一體どうするつもりだらう。

輕く進行が止つた。運轉臺からは降りて行つたやうである。五分ばかり過ぎる。彼は右腕を伸して窓の桟を摑み、漸く半身を上げて外を眺めた。小さい家ばかり並んでゐて汚い着物を着た子供達が十人位遊んでゐる。醫者の家などありさうにも無い、或ひはこの道の反對側かも知れぬとも思つたが、それでは何故此方側に止めたのだらう。彼は不安になつた見てゐると、直ぐ眼の前の狹さうな家は入口の格子戸が開かれたまゝになつてゐたが、其處から、詰襟を着た青年が現はれて此方を見ると、ちよつと目禮して、車の扉を開けた。

「私の家ですが、ちよつとこゝで休んで頂きたいので。」

それは先刻と同じ聲であつて、この車の運轉手だとは直ぐに判つた。

「君、こんなに怪我をさせておいて、何故直ぐに醫者へ伴れて行かぬのだ。」

青年は、心を打たれたらしく俯向いて、涙を拭つた。

「お詫びの仕樣もないのですが、……僕は酷い貧乏ですからちよつと金を作る間、家に寢てゐて下さらんでせうか」

北川は責めたい氣持を挫かれて言葉を止めた。

「お願ひします。」と青年は言つた、北川は默つて首肯く。

北川は青年に負はれてその家に這入つた。六十位の婆さんが來て、そは〳〵して附添ひ乍ら入口の次の部屋に運んだ、其處にはもう蒲團が敷いてあつた。北川を寢させて了ふと、老婆が枕許に手をついて

「伜が飛んでも無いことをしまして、何ともほんとにお詫びの仕樣もないことでムいます。まあ惡氣があつてのことでもなし、腹が立つでせうが勘辨してやつて下さい。」

「私は奥田博といふ者です、慌てゝ名も言はないで失禮しました」

息子と母の心遣ひ、そして破れた疊、破れた壁を見ると、北川は苦しみを耐へて寛大になつた。北川のポケットにも矢張り金は無かつた。どうにも仕樣が無いのである。奥田は母に頼んでをいて外出した。

×

左の足は骨が折れたかも知れぬ、いつまでも激しく痛む、老婆は心配しては種々と世話をして呉れる。夕食の終つた時、北川の枕許に坐りこんでまた詫びた。

「あれも仲々氣の附く子で御座いますが、金のことは思ふやうにゆき難いとみへて段々遲くなつて濟みませんね、どうぞまあも少し待つてやつて下さいまし。」

「仕方がありませんからなあ。」

「私もこれで眼の良い頃には、内職の一つも出來たもので厶いましたが、今では半分手搜りのやうなもので、すつかりあれの厄介になつて居りますし、あれもまだ先月まで見習で厶いましてねえ、親父の殘して行つた借金に責められまして。若い者ですが、ほんとに、傘一つ靴一つ、滿足なものを持つこともやうせずに居りまして。」

「あゝ、さうですか。」

「それでもあれは、まあお蔭樣で能う孝行をして呉れましてね、今日なんかも實は、朋輩の衆は皆休んで仕舞ふてゐられるのに、あれだけがあゝして働きに出ましたやうなことで、……それがまあ反つてあなたさんをこんな目に逢はせたやうなことにはなりましたのですが。」

「では今日は公休日ですか。」

「いゝえあなた、さうじや御座いません、何でもこの自働車の會社の御主人が金の出し方が少ないの、餘計に働かせるの何のつてやかましい事を申しましてね、皆して働くのを止めてお主樣に楯突いて居りますらしいので厶いますよ。」

「ぢやあストライキだ、そして奥田君はそれを裏切つてゐるんだな。」

「あなたさんはお若いから、そんなこと面白いかも知れませんが、考へてもやつて下さい。こんな年寄りはあるし、借金取りには責められるし、會社が首にでもなつたら、もうどうするのでせう。親子が餓え死するより他にはありませんから。」

北川は掛蒲團を跳ね除けて起き上らうとしたが駄目だつた。やつと首だけを上げた彼は昂奮して眞赤な顔になつた。

「誰がこんな裏切り者の家になんか居るものか、もう僕は一分間も居たくない。さあ僕を起して歸らせて呉れ！　足を挫いたのは過失として許しもする。だが、階級戰の裏切り者がどうして許せるッ！」

老婆は、坐つたまゝ一膝づゝ後退りして、驚いたやうに此方を凝視めてゐる。

「お婆さん、よくお聽きなさい、この家ばかりで無い、他の人達も同じやうに餓え死しさうになつてゐるのだ。菜ッ葉服を着て會社で働く職工も、大きい會社で綺麗な洋服を着て机の前で仕事する月給取りもさうだ。少しの給料でいつも貧乏暮しをして子供も上の學校へはやれぬ、病人も醫者に診せられぬのだ……そして年中忙がしく働いてゐる。……そして資本家が遊んでゐて儲け込むのだ……おい、お婆さん僕等貧乏人が皆の力で皆を助け樣とするんだよ、それの一つがストライキだ。……おい。しつかりして呉れ、お前達はこれを裏切る程の惡黨か、そんな人非人かッ！」

婆さんはがたがたと震へてゐる。北川は默つて睨みつけてゐる。少し經つて老婆は漸う口を開いた。

「さう、大きい聲を出されると、怖くなつて仕舞ひますからどうぞもつと靜かに話してやつて下さい……何やらむづかしさうなことで御座いますが……落着いて聽かせて貰へたら私も合點が行くかも知れませんから。」

北川は足が堪らなく痛むので、また枕についた。そして嘆息するやうに天井を眺め乍らゆつくり話した。

「お前の息子は自分一人良いやうにと考へてゐるのだ。だがね、貧乏人は、どんなに賢こく立廻つても、一人では駄目なんだ。皆の力で、皆が救はれるやうにするより仕方がないのだよ。」

「それでもね、あなたさん、あの會社だけは別ですよ。あれが歸つたらよう話を聽いてみて下さい。あれは惡い子で

は御座いませんものね。」
「それはねお婆さん、今ね深い學問が出來てゐて、世の中の仕組がすつかり判るやうになつて了つたのだ。あの會社だつてどの會社だつてこの世間の總てがたつた二つに別けられるのだよ。資本家といふ奴と勞働者とにな……だからどんな隅つこの小さいところで働いてゐる勞働者でも、この戰爭の爲に命懸けで働かんといかんよ……お前の息子のやうに、こそこそ敵の方へ廻つてこの戰爭の邪魔をする奴なんか、僕はもう見るのも厭だよ。」
　老婆はしくしく啜泣きをはじめた。北川も默つて考へ込んで了つた。
其處へ表の格子戸の開く音がして、すぐ奥田が駈け上つて來た。
「遲くなりました。」と一言云つて、泣いてゐる母を見て、
「心配を掛けましたが漸く出來ました。」
　そして北川に對して、
「では醫者のところへ御伴しますからどうか。」と誘ひかける。北川は振向きもせず、
「君、金は何處で拵へたのだ。」
「いや、御心配をかけましたが、會社の方へ行つて種々頼んでみますと、特別にと言つて少し金が貰へましたから。」
　北川は顔を上げてぐつと睨んだ。
「何だ、會社で貰つた？」
「誤解しないで下さい、この金は勿論、あなたの怪我の爲に使ふつもりです、決して……」
「そんな汚れたストライキ破りの金など投げ棄てゝ仕舞へッ！」
　奥田はハツとして唾を飲んだ。
「君がストライキを裏切れば、母親が養へたり僕の怪我が治つたりすると思ふなら間違ひだぞッ！　皆で運動に加つ

てこれで無産階級全體が一緒に救はれるより他には本當に救はれることは無いのだ。」

奥田は片手を疊について、長い間俯向いて居た。漸う顔を上げると

「よい御教訓でした。今迄のことは許して下さい！　私はあなたを今お送りしてをいて罷業本部へ廻ります。私も皆と一緒に闘ひます。」

「よく言つた、君。」

北川は手を出して、奥田と堅い握手をした。四つの眸は感激に燃へてゐる。傍らから母親が

「偉いお方だね、私にもどうやら譯が判つて來たやうだよ。」

「さうです、阿母さん、僕は惡るいことをしてゐた！」

老婆は聲を立てゝ泣いた。

×

或る夕方、北川は池袋の方の狭い裏通りを、棒切れを杖にして左の足を引づり乍ら歩いてゐた。そして電燈の無い細い露路に這入つて行つた。其處には或る薬屋の勝手口があつた。彼はそつと障子に手をかけて音の無いやうに明けると、急いで中に這入つて小さい聲で

「御免下さい……居ますか」

と言ふ。待つてゐると、二十五六になるこの家の主人が出て來た。默つて北川の傍へ寄つて來て、座敷の方を指差した。北川は耳を澄してよく聞いてみると郷里の父親の聲である。主人は小聲で、

「君の居所を聞かせよと言つてやかましいんだがね。どうする、ちよつと丈け逢つてみるか。」

「さうですね……どうして上京したのでせう。」

「此頃スパイが行つては東京の方でどうもよくないことをしてゐるらしいと言ふので心配したらしい……三男だが、

來てゝは置かれぬのださうだ。

「……」

「逢はない方がいいだらうね。」

「こんな怪我をしてゐるのを見たら、醫者に診せてやりたいからどうしても歸れなんてやられて困ると思ひます。」

「それでは止し給へ……近頃は失業して方々の友達のところを泊り歩いてゐるからとでも言はう。」

「さうして下さい。新聞配達をやつたこともまた彼處に居ることも判つたら、ぐずぐず言ふに定つてます。すぐ家柄がどうとかなんですからね。」

「一晩か二晩より泊れぬ早く歸らなければならん用があると言つてゐられるよ。」

「ぢやこの先二三日御無沙汰することにします……それからこれが。」

と、ビラを出して五十枚ほど數へて渡す。

「出來たね、確かに預つた。」

彼はビラの殘りの二百枚ばかりを、もう一度堅く包みなほした。二人は目禮して、北川は急いでまた外に出た。

父の顏も何となく見たいと思つたが、そんな小さな感情が殺せないやうでは駄目だと自分を勵まして、それよりも、大切な宣傳文のビラを早く配らなければならない。骨に罅の這入つた痛い足を運んで一生懸命に歩いた。

池袋から省線に乘るつもりで、彼が豊島師範の前まで來た時である。ふらふらと怪しい男が近寄つて來た。

「その包みを拜見したいね。」

勿論スパイだと直感はして居た。

彼が應じないと、――急ち――留置場へと、――薄暗い道である。

自覺者が、今、無自覺者に、擲られ乍ら引張られてゆく。



瓦斯爭議と無產婦人

佐久間晋

◇値下げ問題とは？

去る四月十日の東京市會は、滿場一致で瓦斯料金の値下げ並に計量器使用料撤廢に關する建議案を可決し、當時の船田市長代理は十八日これを東京瓦斯會社に手交した。それには炭價の暴落、副產物の利用、需要の激增等が主なる理由として擧げられた。今、東京瓦斯會社の料金に就いて見るに、一千立方呎の料金が二圓二十五錢である。郊外となると、今少し高く二圓四十五錢を支拂つてゐる。しかるにその生產費はといふと、製造費六十錢、供給費二十五錢、總經費五十錢合計一圓三十五錢である。即ち會社は、一千立方呎に付き一圓といふ不當な儲けを收めてゐる譯である。而もこの二圓二十五錢といふ料金は、大正八年以來のものである。當時炭價の暴騰を理由として、會社は市に對し一千立方呎一圓の値上げを要求して來た。併し當時の市會は、一圓の値上げを不當と認め、但し五十錢だけは止むを得ないとして許したものである。而もその頃石炭一噸の値段は二十二圓であつた。今日炭價頓當り十七圓に暴落せるに拘らず、會社は瓦斯の料金を下げやうとはしない。一圓値上げして貰はなければやつて行けぬと要求しつゝ半額にねぎられても缺損どころか配當を續け得る怪腕の持ち主會社が、敢て炭價が五圓下がつたからとて驚いて瓦斯の料金を下げやうとはしなからう。かうした高利をまで支拂つて私達市民が買つてゐる瓦斯をさて臺所で使つた結果はどうであるか。瓦斯の出が惡くてろくろく御飯も炊けない、或は油煙で鍋の底が黑くなるといふ聲は屢々耳にするところである。公開檢査施設を持たない私達消費者は、どんなに壓力の不足してゐる瓦斯を供給されてゐやうが、或は又どんなに不純物が混入されて熱量の不足してゐる瓦斯を供給されてゐやうが、全く知る方法とては無いのである。ま

して採光時代そのまゝの供給設備は燃料としての瓦斯を供給するには餘りに不完全すぎる。結局あらゆる劣惡なる條件で私達は瓦斯を買ふわけである。一方瓦斯會社が所謂副産物なるもので莫大の利益を擧げてゐることを見逃がしてはならない。コークスは勿論のことコールタールを原料とする諸藥品或は染料は、殊更に瓦斯を主とする時こそ副産物と云へるであらう。併しこれらの製品が現代生活に要求されてゐる重要さは、生活必需品としての瓦斯に勝るとも劣らないであらう。やがては今までの副産物を主に、廢物としての瓦斯を利用する時代も來るであらう。まして電氣の大衆化は、すでに採光用として瓦斯をくちくした。供給設備の簡易、使用の容易、それに衞生的である等の條件は、早晩熱用として電氣が臺所を占領する時代も來ると見なければならぬ。さてかうした怪しげなる瓦斯を私達市民がどれだけ消費したかを知る爲に、會社は各戶に計量器を据へつけて置く。そしてその損料を取るのである。物を賣るのに、買ふ方の家に勝手に計量器を持ち込んで、その損料を取らうとは餘りにも不合理ではあるまいか。そこには、米屋や酒屋で米や酒を賣る時桝の使用料を取ると同じ不合理さがある。次に引き込み料であるが、瓦斯そのものは生活必需品であり、當然その供給は普遍的であるべきだ。報償契約といふ特殊の約束で保護を與へ、事業の獨占を許してゐる所以は此處にある。しかるに大衆の大多數である無産階級に瓦斯の需要者が、同じ生活必需品である電燈の需要者程に大衆化してゐない。所謂何軒長屋には瓦斯が引き込んでないのを通例とする。しかし一二の電燈は必ず取りつけてある。現在、東京市ではこれ等一二燈需要戶數は電燈需要數戶數の六割であり、若し三燈需要戶數を加へるなら全體の八割を占めてゐる。この八割の階級こそ中産以下の無産階級であり、この階級に瓦斯の供給が普遍化されないのは、全く引き込み料の高價な爲であり、同時に瓦斯の料金や計量器使用料にも至大の關係があるのである。

瓦斯、電氣、水道、交通機關等凡そ公益事業なるものは、無産階級の生活要求を無視する事は出來ないのである。

◇增資問題

市の要求を受け取つた會社は、回答はさておいて、四月二十五日の重役會議で突如資本金を現在の一億圓から倍額の二億圓に增すことに決議して市民を驚かした。その謂ふ所は、事業資金に充當するとの事である。獨占的會社の信用を以てして、現在の行詰つた金融市場から六分乃至七分の利子で社債を募ることは極めて容易なことである。それを九分の株式によつて求めやうとするのである。原則として事業の擴張資金は株式によらなければならぬとは議論としては成り立つであらう。併し株式になるならば假りに一億圓の四分の一拂込みとして二千五百圓に對する七分と九分との開き二分による

儲けは年五十萬圓である。同時に配當や株が額面金よりも高いといふ事は、そこに權利金なるものが生ずることを忘れてはならぬ。併しこの問題は堀切市長の言明せる如く、値下げとは全々別個に取り扱ふべきものであり、市民の反對理由も瓦斯の供給が公益事業といふ大衆的の性質から推して必ずしも妥當と云へない所もある。即ちその理由は增資にする事業資金は、市内の事業擴張でなく、近郊の供給擴張に用ふること、及び將來市營とする場合の買收價格の多いことは、それだけ市民の負擔を多からしむるとの二つである。併し瓦斯事業は、市の事業ではなく公益事業である。從つて國家の立場から見て、より多くの人間が利益を得るならばその目的は達せられるのである。供給を特定の區域に限定することは、即ち不合理と云はねばならぬ。又將來買收の場合、道路の使用とか、鐵管とか、實際の投資である以上事業の擴張による資産の增加は、當然のことゝ云はねばならぬ。若し市と會社との交渉が決裂して、會社對商工大臣の問題となつた場合、商工大臣は右の理由によつて恐らく增資を許すであらう。たゞ問題は、自治體の決議を中央政府が覆す事の如何のみである。

◇値下げ問題の社會的意義

瓦斯電氣等の爭議は、表面的には營利會社對一般消費者大衆が自己の生活要求の爲の運動ではあるが、會社が公益事業を營むものだけにそこに社會的意義を生ずるのである。（第一）に、勞働爭議の場合は、利害關係が原則として個々のものであり、從つて爭議の性質は私的である。併し公益事業を營む獨占的會社對一般消費者大衆の經濟鬪爭は、公的のものである。（第二）從つて公的である以上大衆の運動であらねばならぬ。大衆の大部分を占むるものは、中産以下の無産階級である。結局無産階級が消費者の立場から資本家階級に對して生活鬪爭を行ふ事になり、鬪爭形態の構成は、勞働者農民から、小企業者、俸給生活者に至る下層市民階級に亘ることである。（第三）資本家階級對無産階級の生活鬪爭であれば、そこに何等かの目的意識を持つ。即ち公益事業の公營化である。

◇値下げ問題と婦人團體

婦人市政研究會、婦人參政同盟、社會民衆婦人同盟、婦選獲得同盟の四團體が多少輿論に呼びかけられた形だとは云へ兎に角奮起して共同戰線を張り、生活要求の爲め實際運動に參加したといふことは、何といつても從來の態度に較べて一段と進歩的と云へやう。が併し、日本の婦人に禁物なのは同じ問題の長く未解決にあることである。壓力が不足してゐる上に不純物が混入してゐる瓦斯が燃へるともなく消えるともなくプスリプスリとくすぶる樣に今度の問題は婦人の行動を一貫せしめなかつた嫌がある。それは必ずしも婦人が、消費經濟に目覺めないといふ理由ではあるまいが、かうした問題が持つ社會的意義とかけ離れた意識の結果ではあるまいか。

家庭の働きと保健

一時間の拭掃除――雜巾掛けは鐵砲擔いだ兵隊さんが一時間の駈足と同樣の運動になるといふ――家庭の婦人達に耳よりな研究が發表された、十七日榮養研究所に開かれた第二十二回營養學會で『本邦婦人の家庭内作業時に於けるエネルギー代謝に就て』の高比良武智喜瀨三氏の共同研究である。

△

日本婦人が家庭にあつて最も普通に經驗する裁縫食器洗ひ、掃除、米とぎ洗濯、子守等代表的な十種の動作に就いてそのエネルギーの消費の程度を調査したものであるが、それによると拭き掃除が一番はげしい勞働で平靜に仰臥してゐる時の約四十七倍のカロリーを要し、洗濯で四十四倍、一升のお米とぎが三十倍、掃除二十九倍弱といふ順序となつてゐる。

△

お掃除にしてもはたきを使ふだけな

國際聯絡婦人委員會のこと

金子しげり

日本の婦人團體も外國のそれと提携する事が年々多くなり、從つてそこに何等かの聯絡なり統一をを計る機關の必要がある事は、心ある人々の皆覺つてゐた所でしたが、昨年或る機會からこの機運が促進されて、本年の二月、國際聯絡婦人委員會なる組織が生れました。

即ちジュネーブにある國際婦人聯合委員會（Joint Standing Committee of Women's International Organisations 國際的婦人團體よりなる委員會で主として國際聯盟の仕事を女の側より助けもし主張もするのが目的）に於ける萬國基督敎女子青年會の委員から基督敎女子青年會日本同盟の辻松子氏にあてゝ、その會と日本婦人團體との聯絡機關の設置を慫慂して來ましたので、同氏は、各方面の代表的婦人を集めて協議會を開き、約十ケ月の準備期間を費して右の國際聯合委員會及他の海外に於ける各種團體及個人と日本に於ける婦人團體及個人との聯絡を計る爲の機關の設置を見るに至つたのであります。

この委員會は現在の所、政治、保健、敎育、勞働、社會事業、社會運動の各方面を代表する十八名の委員で組織されてゐます。今その顏ぶれを擧げてみれば、

市川房枝、星　愛子、德永恕子、酒井道子、河崎夏子、金子茂、ガントレツ

ら二十五、九倍カロリーを要するが、これは丁度散歩と同じ程度の運動、子守は赤ん坊が寝てゐる時と泣いてゐる時で大分相違するが、普通二十三、五倍、大根切りは二十一倍強、お皿など洗ふ仕事は十八、八倍、裁縫十三、九倍で坐つてゐて起ちあがるだけに十一倍半のカロリーを費すのに比較すると大した勞働でない事が判り、骨が折れるやうで案外さうでないものになる。

益々增える失業者

勞働者失業問題はいよいよ深刻な社會問題となつて來たが日々と增加する失業者の群を見るときその數字の現はれははつきりと就職難の事實が感ぜられる。

東京市の失業者は五月末現在の調査に依ると二萬七千人にして復興事業の完成につれて本年師走には六萬九千人の失業者が勞働市場に現はれると市の社會局の調査は發表して居る。あだかも洪水の如き失業群を震災復興事業で

ト恒子、吉岡彌生、竹中繁子、辻まつ子、柘植愛子、奥むめお、久布白落實、藤田たき、赤松常子、木内キヤウ、上代たの、周防てふ氏で、これらの委員は、この委員會を支持する參加婦人團體及未組織の分野を代表する個人と合同の選擧母體で選擧されるので、この母體に參加せる團體は今の所左記の如きものです。

日本少年保護婦人協會、日本女醫會、佛教女子青年會、婦人平和協會、婦人參政同盟、婦人消費組合協會、婦選獲得同盟、基督教女子青年會日本同盟、聯合全國女子青年團、全國產婆會、全國小學校女教員會。

委員、參加團體は個人の義務は、それぞれが海外から受けた日本婦人全體に關する書信は委員會に提示して協議にまかせるし、日本婦人を代表して海外に通信する場合も同樣であるといふのです。勿論、全國的な團體で外國のそれと國際的關係を有してゐる場合は一々事手續は經ませんが、それでも重要な事は一々報告される筈なのです。

つまり、外から入つて來る時も、又出て行く時もこゝを一度は何かの形で通るやうに作られたもので、この機關のはたらきによつて、對外關係を最も有效に意義あるものとしやうといふのです。

實際今迄は餘り素性の解らない外人がどえらい紹介狀を持つてやつて來たり、又まじめな視察者が、その便宜をえられないで困つたりする事も多ければ、何か日本婦人の代表を要する時でも、どこの團體にむりをかけたらよいのかは已に國

際的關係のある團體なり分野以外は全く混沌としてゐた次第ですから、こうした機關は非常に必要であつたのです。

勿論、十ケ月かゝつたといつて、この新委員會が決して最初から完全なものでもなければすぐにうまく運用されないかも知れませんが、これは各方面の婦人の厚意的な援助と支持によつて、次第にその使命を果す力を持つ事が出來るだらうと思ひます。

同時に、この國内に於ける婦人團體も亦これに刺戟されて漸次全國組織にとゝのへられ、未組織分野にも組織が生れ行くであらう事が考へられるのです。即ち今日は女醫や産婆の全國的團體はあつても、看護婦にそれがなかつたり、小學校女敎員の團體はあつても、中等學校のそれに何の組織もない、職業婦人や勞働婦人の方面にもその眞で尙開拓されてゐない點が多々あります。所謂婦人會といふものにしても地方的に大きなものがあつても、未だ全國的のものはありません。

それで初めこの委員會が則られやうとした時集つた人々の中に、この全國の婦人團體の組織卽ち National Women Council を作つた方がよいといつた人も尠くはなかつたのでした。何れ近き將來にはそれが日本にも生れるでせうそして それが International Womencouncil に聯絡して、世界の婦人と手をつなぐ事が出來るだらうと思はれます。

日本の婦人運動は外國のそれに比べて、非常に遲れてゐます。日本の婦人が封建制度にてしがれてゐる間に、歐米の婦人は自由主義的婦人運動によつて、かな

辛うじて食ひ止め今日に至つたのであるが、復興事業の成ると共に約七萬有餘の新失業者が街頭に投げ出されるのである。

市設紹介所員の談によれば各支所の紹介所の前には早朝より失業者がむらがり午前七時紹介所のドアーが開くと見るや、どつと一時に押しよせ、十枚の求人札に百人の人が集まる有樣で、流血の騷ぎ迄持ちあがり、場内は殺氣立つて警官の一人や二人では到底手の下し樣なく、只傍觀するのみで、江東橋のなどは一分厚みの鋼鐵製の網が張つてあるが一週間と持たない、以前の樣に靜かに整列して順番をまつと云ふことはないと。

之等二萬五千餘の失業者は大部分每日の樣に仕事にあぶれ五十錢でも得よう最後には十錢でも得ようと職を求めて歩く。かくて、今の社會が今のまゝである限り、貧富のへだたりは益々はげしくなつて行きそれと共に、失業者の數も益々殖えて行くのである。

レーニン未亡人

レーニン未亡人は、共產黨の最古參の一人で、今はサヴエツト●ロシア敎育部の政府委員をしてゐる。共產黨の人達にも、又一般の人達にもその娘名、ナヂシユダ●コンスタンチノウナ●クルプカヤとして知られてゐる。彼女はレーニンと同じくウオルガ地方で生れ、未だ若い學生であつたとき、ウラヂミル●イリツチ●ウリヤノフ（レーニン）と結婚し、彼の亡命中ずつと一緖に暮してゐた。レーニンにとつて彼女は實に精鍊の妻である。革命後は無產者政治敎育本部で、全露無產者のために絕えまない敎育と宣傳の事業を續けてゐる。彼女は主として次の三部門を純共產黨的態度で活動してゐる。

（一）學校に政治的影響を及ぼすこと、（二）農民の政治的敎育、（三）赤軍の中に政治的宣傳をすること。

彼女は小さい年とつたお母さんと言つた風な親しみの深い女性である。

りの程度までの婦人解放を實現し得たのです。

私は日本の無產婦人運動の急激な發展を心から思すると共に、知識階級婦人の善處によつて、自由主義の婦人運動による婦人解放が今一段となされてもいゝと思ふ立場から、この一委員會の出現を欣び、出來るだけの力を獻げたいと思つてゐます。

因に、昨度の汎太平洋婦人會議などもかういふ會さへ出來てゐるが今少し合理的な代表の選出もなされた事と思はれますが、今度、同會議の後始末なり、第二同人の準備なりについて、井上秀子氏他數名の委員に委せられてゐたのですが、最近井上女史からその事を一切この委員會に委ねたいといふ申出があり、會はこれを承認しましたので、來年に迫つた第二回會議の爲に何れ、適當なる方法によつて準備が開始されるであらうと思はれます。

夏くれば

池田みわ子

夏來ればギター買はむなどの約束も三年越しなるわが生計かな、

庭にいでゝ扉をくみつゝ蝶をみるこのひとときの幼なきこゝろ、

池ありて小魚すめりと人ごとに笑みて告げけり尋に足らぬを。



職業遭難記……………………林　芙美子

省線電車雜感…………………村内彌榮

職業婦人第二の自覺…………堀江かどえ

◇職業を通して私達は何を見たか

職業遭難記

林　芙美子

一

私は宿命的に職業放浪者である。貧乏な商人の家庭に生れ小さい時から、轉々と九州一圓を行商して廻る父母に連れられて、お友達も無ければ、美しい故郷の山河も知らないで私は過して來た。

やつと、小學校に上る頃になると、一本拾錢の扇子を風呂敷に背負つて、直方の炭坑町を軒並に歩いた。

私の少女時代の空想は、女成金になりたいと云ふ事でいつぱいだつた。

粟おこし工場の女工をふり出しに、ぜんさい屋の小女、女中、勸工場の賣子、思ひ出すさへ呆然とする程、私は多くの職業についてゐる。

働かなければ食へない少女時代だつたので、小學校も七度變り、四年の學課をすつぽかして、三年生からすぐ五年にはいつた。そのくせ卒業する時の私の年は皆の兒童達より二つ

も上で、その頃の私は學校へ行く事が一番苦手だつた。

私は上京して十年になる。田舎を食ひつめてしまつて、私達親子が少しばかりの野心を抱いて、東京へ行つてみやう、何か芽の出るやうな商賣が轉がつてゐはしないか！と何もかも清算して東京へ出て來たのは大正九年の冬だつた。

九州、四國、中國の暖い土地に馴れた私達親子は、身を切るやうな東京の空つ風には、ひとたまりもなく參つてしまつて、上京して來た事をどんなに後悔したか知れなかつた。

その頃の新宿驛は、ボクボクと鳴る粗末な陸橋で、ジャヅの街に變つた今の新宿を空想してみるさへむづかしい舊街道だつた。

新宿驛の前の三越は、たしか運送店だつたと覺えてゐる。

大久保百人町の植木屋の二疊に親子三人が落ちつくと、あくる日から、父は父、私は私で、東京の空つ風をもぎちぎつて、不案内な街を野良犬のやうに彷徨した。

その頃の、時事新聞の職業案内欄は、どんなに朝の寢覺めを樂しましめた事だらう。

東京で驚いた事は間代の高い事と、おわいに金を取られる事だつた。

父も母も月末に迫るのに、何のいゝ職業も見付からなくて、かなりペシャンコになつてゐるらしかつた。

その時、私が新聞の廣告欄で見付けた、珍らしい品物があつた。

――轉がしても酒のこぼれない德利、上品で贈答にも喜ばれる品、一組二本入り壹圓。

「ホウ……これは又面白い、これは一寸賣れそなぞい。」

父は子供のやうに喜ぶと、四拾圓ばかりの現金をすぐ名古屋の問屋に送つた。

それからの三人の空想はとても鼻息が荒くて、田舎人らしい喜びでいつぱいだつた。

だが、一週間位して來た、その荷物の大半は破損してゐて、私達があんなに期待してゐた物とは、あまりにも相違してゐた。

鯉の瀧登りだとか、七福神だとか、俗つぽい模樣で、ガラスのやうに薄いので、持ちあつかいに大變だつた。

「ひどい事をするじやないか。」

母親は期待のあまりに大きかつただけに、可哀想な程しよげてゐた。
莫迦らしくて一組壹圓には、正直な田舍の商人に賣れさうもなかつた。
兎に角、やつてみやうと云ふので、親子三人掛りで、新宿の煙草專賣局の横に雨戸を借りて、始めて大道商賣を開いた。
母と私は客人らしくその前にたつて、鯉の繪や、七福神のその德利を、珍らしさうにくる／＼廻してみながら、冗談ばかり云ひあつてゐた。——それを私達はさくらと云ふ——一時間たつても、二時間たつても、見て行く客はあつても馬鹿らしくて買つて行く客はなかつた。一つの喜劇でしかない。
「えゝ、くそ！　まんの惡いツ。」
父は一圓の値札を一ペンに五拾錢に書きかへると、パラパラ二三人の客があつたが、やつぱり轉ばしても酒のこぼれない德利は、一笑に付されて誰も相手にしてくれなかつた。
正直で短氣な父親は、四拾圓の資本を掛けた、その德利を私達か泣き喚きながら止めるのも聞かずに、ガード下の溝の中へみんなぶち破つてしまつた。

二

身も皮も剝れた私達である。
——畫心のある方に出來る美しい仕事あります。御來談を乞ふ。
小さい時から私は畫を書く事が大變好だつた。色々の子供雜誌の口繪を下寫しては、木賃宿の壁に張りつけてゐた時代があつた。
出來る事ならこんな仕事がいゝと思つて、私は本鄕の團子坂にあるその內職先を尋ねて行つた。
仕事と云ふのは簡單である。
白樺の皮のしぼりに、油繪具で鈴蘭だとかチユウリツプ、クローバーなぞを形の通りに畫くので一枚三錢の工賃である。勿論、繪具はこちら持ちで、馴れて來れば日に五十枚は樂だと言ふので、私は五圓の保證金を入れて、四五枚の見本と、束になつた白樺のしぼりとを貰つて、私は意氣洋々と歸へつて來た。
「お前にそんなもん出來るかね。」
母は大變心配してゐたが、私は畫については素人である事

も云つて來てあるのだし、向ふの主人も、全々畫心のない人でさへ、一二度描けば出來る仕事なんだから、と心切に云つてくれたんだから、多少自信のある私は、家中繪の具だらけにして、二十枚ばかり見本よりも丁寧に描きあげてしまつた。

口でふうふう吹いてみたり、火で焙ぶつてみたりして、私はその繪の具が早く乾くのをどんなに待遠しかつたらう。

二日目に、兎に角出來上つた白樺のしぼりを二十枚程私は内職先に屆けに出掛けた。

「どうもこれは私の方の商品には向きません。丁寧よりも粗雜でいゝんです。どうも戴けませんが……。」

秋は針金のやうに尖々したその主人の、前に反して冷い表情を、ぶんなぐつてやりたいとさへ思つた。

やうやく泣きつくやうにして、壹錢で引きとつてもらふと二十錢銀貨を一ッ握つて悄然と歸へつて來た。

勿論それから四五度私は描いては持つて行つたが、やつぱり壹錢位で、保證金も返へしてくれなかつた。大久保と本鄕では電車賃も大變だつたし、面倒だつた。

生馬の目を拔くと言ふ古諺が、段々眞實になつて來た。

何日も炭の買へない日があつた。

或日父がいつものやうに街の彷徨から歸へつて來た時、一人の四十位の男を連れて歸へつて來た。

それは芝の小さなミシン屋さんで、今度、白いフランネルで(ゴムでぴちつと止める)、風のはいらない猿股を拵らへたから、賣り捌いてもらひたいと云ふのだつた。丁度今のパンツのやうなもので、男の褌の代りになるものだつた。價格も安くて、女の仕事にはもつて來いだと思つた。

淺草で酒を呑んでゐて、親しくなつたといつて、父はその人を連れて來たのだつた。

あくる日、信用してくれたのか、その人は自轉車で、品物を持て來てくれた。私と母は植木屋で茣蓙を借りると、父に連れられて、澁谷の道玄坂は大道店を開いた。晝間は夜店の商人のやうに、むつかしい親分への口入れもなくて、只店先に一寸斷ればよかつた。ポカポカした珍らしいお天氣だつたそばや屋の前に私達は、茣蓙をしいて、白い猿股を山のやうに積んで、父に一つ二十錢と云ふ價札を出してもらうと、日暮れ方までに、二拾圓位の仕事をして歸へる事が出來た。

それからの私達は始めてホッとした氣安さだつた。品物も

順よく後から後から出來るし、お天氣も續くし、久し振りに長閑だつた。

茣蓙の上に座つてゐると、まるで、乞食のやうな氣がしないでもなかつたが、馴れゝばいゝ仕事だつた。本も讀めるし母と代りばんこで、活動の立見をしたり、商賣は愉快だつた

こんな事なら夜店も出した方がいゝと云ふので、場所割りの親方を紹介してもらつて、仲間入りの酒を一升買つて、父と私はゴミゴミした、道玄坂裏の、その親分の處へ出掛けて行つた。

場錢は毎晩三錢づゝ掃除婆さんが集めに來て、月の十五日には電氣代六十錢拂ふ事になつてゐた。

風の吹く寒い夜なんか、目も鼻も口もザクザクと埃りだらけになつて、驟雨に會つたりすると、大道商人はみじめだつた。

東京の冬は、風か雪か雨か、全くおだやかな日は數へる位だ、それに霜がひどくて、寒にはいると、目に見へて母は衰へていつた。

三

父はよく、夜店の本屋で立志傳を買つて來ては、母や私に讀んで聞かせた。〇〇時計屋は前は夜店商人だつたとか、そんな事を云つては、自分もそんな時代の來る事を空想してゐるのか、私は五十過ぎた父の靑年らしい情熱をいとしく思はずにはいられなかつた。

だがその仕事も一ケ月位で、ミシン屋さんは、電車にひかれて、死んでしまつた。それからの私達は、その見本をもつて、隨分ミシン屋を搜がして廻つたが、みんな程よく斷はられてしまつた。

色んなフランネルの端し切れで拵らへるのだから、それ一方でするのでなくては、引きあはないし、工賃も、づつと高い事を吹き掛けられるので、驚いて引き下るより仕方がなかつた。

東京で始めて、歪んだお正月をすませると私はぢき、新聞の廣告欄で、或株屋の女事務員募集に應募しやうとして、毎日履歴書を丁寧に書きかへては父に見てもらつた。

日限があつたので、私は質から羽織を出してもらふと、千代田橋ぎわの、その株式店に出掛けて行つた。

うまく採用してくれますやうに……神樣に手を合せるやう

な氣持ちで長い電車に揺られた。

小僧に履歴書を渡すと、じき二階のピカピカ掃除の行きとゞいた應接室で、五十位のデップリ肥つた重役らしい人の前に出されて私は膝小僧が妙にブルブル震へる思ひだつた。

１２３４５６７８９10　大きな臺帳に、こんな數字を幾度も書かせられると、明日速達で御返事しますと言ふあつけない言葉を聞いて下へ降りた。

下には、もう五六人の色々の美しい服装をこらした應募者が、人形のやうに固い表情で私を睨んだ。

私は到底駄目だと思はずにはいられなかつた。ニコニコ絣の上から、銘仙の羽織を着てゐる私は、美しい彼女達の敵ではなかつた。

明日と云ふ日がどんなに待ち遠ほしかつたらう……。

速達が來た！　しかも×日より御出社を乞ふ、と云ふとてつもなくすばらしい速達だ。

始めて月給取りになる。父母もこの事だけで宇頂天になつて、なけなしの財布をはたいて小間切れで、熱い御飯をよそつてくれたりした。

足袋をそろへたり、下駄を洗つたり、×日の來る日がとても待ち切れない程、樂しみだつた。

あんなに澤山の應募者の中から、選らまれた二人の事務員は、私と、敎員上りの萩ノ谷と云ふ人だつた。待合の名前のやうな彼女は、茶の袴を裾長にはいて、いつも光つた靴をはいて來た。

二人居る小僧達は、彼女が來ると、

シヤラ　シヤラ　シヤラと出て來るは
女學生か淫賣か……。

などゝはやしたりした。

私達の仕事は、玉をつけたり（簿記のこと）お客樣達への封筒を書いたり、御客へ茶を出したりする輕い仕事だつた。

場が開けると、二イカイ、三ヤリツ！　と自轉車を飛ばして歸へつて來る小僧の言葉がどんなに面白かつたらう。月給は辨當向ふもちで三十五圓だつた。朝九時出勤で、四時には家へ歸へれた。

粗食に馴らされた私の唯一の樂しみは、丹塗りの箱辨だつた。今日は何だらう、晝近かくなると、生唾が出た。

父も母も目を圓くして私の話す華かな株屋の話を聞いた。羽織の裏いつぱいに〇畫の模樣のついたのを見せて、顔をあかめさせるお客もあれば、黒い眼鏡を掛けた地味づくりな美しい未亡人、白い濱縮緬の帯に、むかでのやうな金鎖を巻いた田舎大盡、全く此株式店は社會の縮圖だつた。

私は茶碗を伏せて、サイコロを轉がす、アミダも引いた。重役達の會議があるたびに、藝者の電話も繁くて、二人の事務員は全く疲れてしまつた。

（未完）

職業婦人の第二の自覺

堀江かどえ

職業婦人の自覺の第一段階は男性への奴隷的地位から對等なる人間的地位を獲得するために、まづ人間の生存に最も必要なる經濟的能力を獲得しようとする思惟から出發してゐる。たとへ、それを男性の支配に對する反逆心から出發させてゐないにしても――解りやすくいへば、女といふものはこれまで男の奴隷であつた。それは主として經濟的に男に縋りついてゐたからで、男の支配からのがれるには男にたよらないで自分のパンを自分で得るやうにすればよいといふやうな可なり理性的な考察からでなくて、單に、一家の生活難から自分自身も何か仕事をしなければならない、それには麻糸を繋いだり、又は狀袋貼りをしたりするよりも事務員にでもなつた方が收入の點から比較にならない程よいといふ考から職業婦人になつてゐるものゝ方が非常に多いだらうと思ふ。麻糸繋ぎや狀袋貼りであつても、それを職業とする以上職業婦人に違ひないけれども、玆では主としても少し群集的集團的な職業に就いてゐる婦人といふ內容で、職業婦人について感想を述べてみたいと思ふ。

職業婦人がどんな考へからその地位を得たのであつても、結局、婦人の職業的範圍が擴張されるに從つて、男性勞働者を勞働市場から驅逐する性質のものであることは爭はれない事實である。如何なる職業であつても、現代では資本主義的營利事業の下に行はれてゐるのであるから、使傭者はより安

い賃銀をもつてより多くの勞働を買ひ取り得ること、いはばより多く搾取することをその營利事業の眼目としてゐるのであるから、男性勞働者よりも婦人勞働者を歡迎するのは當然すぎる程當然なことである。

けれども、職業婦人が勞働市場から男性勞働者を驅逐することは、畢竟、プロレタリアートの結婚難を益々深刻になさしめるものである。職業婦人のために直接的或は間接的に勞働市場から驅逐されて、日日職業紹介所の門を叩いてゐるやうな男性失業群は自分自身のパンさへ得られないのにどうして妻子を養つて行き得るであらう。と、すればそのやうな男性はあべこべに職業婦人に扶養されることによつて結婚生活をなし得るか、或はその性的本能を滿足させるための職業婦人を要求するかのこの二つの道のどちらかを行かなければならないのである。前者の道を行くとすれば、職業婦人は折角これまでの奴隷的地位から解放はされたものゝ、又新らしい男性といふ奴隷をつくるに至る。と、いふのは男性の橫暴なる支配が決して本質的なものではなく、經濟的に女性を扶養してゐたところから發生した人間惡であつてみれば、女性にあつても又男性を扶養するに至れば、又、必ずそれに劣らない橫暴な支配をはじめると見るのが妥當である。ただ、女性の場合は長い間の奴隷的習慣が、乃至奴隷的本能が車の墮力のやうに、どれ丈けかの期間の間繼續するであらうし、又、職業婦人が男性勞働者を勞働市場から驅逐するといつたにしても、その勢力は最近多少表はれて來たものゝまだその絕頂に達してはゐない。のみならず、それは被使傭階級の領域に於てだけであつて、使傭階級の領域は依然として殆んど男性をもつて充滿してゐるのであるから、職業婦人が彼女達への寄食者である失業男性を奴隷的に取扱ふといつても、今直ぐの問題ではない。殊に、男性本位に作られてゐる法律が女性本位に作り換へられない限りに於て、社會一般からいへばこれまで男性の奴隷であつた女性が、その立場を逆にするといふことは殆んどあり得ないことのやうでもあるけれど、然しそれは社會一般的に見てのことで、これを階級的に考察し家庭的に考察すれば、プロレタリアートとしての職業婦人がそれに對する寄生男性を奴隷的に取扱ふことは遠い未來でもないと想像される。つまり、車の墮力が止り次第、さうした逆支配がはじまりさうな氣がする。だが、奴隷的待遇はどちらがするのであつても非文化的であることはいふまでもない。

さらに、他の方面から考へるならば、もし失業男性が間接的乃至は直接的に自分を失業せしめたところの職業婦人に寄生することも出來ず（實際、男性勞働者を勞働市場から驅逐する場合の職業婦人の經濟的收入といふものは、それ以前に男性勞働者が得てゐる場合の收入よりも少いことを原則とするものであるから、それに男性勞働者が寄食するといふことも困難である。）又、寄生するのにも事が自分一個の意志にのみよつて決定される事柄でない以上は、甚だ困難なものであるから當然、性的本能を滿足さすことが出來ないために、當然、さういふ方面の職業婦人を要求するに至る。その結果は女性をして過激な性的勞働に陷入らすのみならず、お互に病毒を感染し合ふやうな狀態に陷つたりする。いはば、共喰共倒れの結果に立到るのである。してみれば、職業婦人は自覺の第二の段階として、そのやうな結果に到らしめるところの社會組織を變革しない限り、徒らに、同じ階級との鬪爭を深刻ならしめることを悟らなければならない。

省線電車雜感

村内彌榮

今日も朝早くから出勤だ。行きたくも無いのに行くのだ。勤めたくもないのに勤めるのだ。たゞそうしなければ、生命をつないでゆく事が出來ないから。

改札口でパスを見せてホームに入る。ブルヂョア婦人雜誌のきらびやかな廣告の下に腰を下ろす。何となく體がだるい近頃あまり健康でない事を思ふと、自分が不安になる。然しびく／＼したり泣事を言つたりしてはゐられない。親や弟妹を抱えて、私よりももつと／＼苦しんでゐる友達の事を思ふ。怒りと勇氣とが出る。私も一ケの無產婦人、職業婦人なのだ。立派な私はプロレタリアなのだ。よし、くそ！　今日も働きにゆかう。今日も虐げられて鬪爭の決意を一そう深めるのだ。

吊革にぶら下つて幾人もの人影が、鋼鐵の車體と入り亂れて眼をくら／＼させた。ホームの人々は短い時間をも待ち衆

ねてゐた樣に、入口へ殺到した。人に押され人を押して車內へ入ると、ムツとした氣持の惡い空氣が全身を襲つた。急に汗ばみそうな氣持になつたとき「ボー」と人を馬鹿にした樣な氣笛が鳴つて、電車は、がた／＼その體を小刻みに震動させ乍ら、荷物の樣に人間をつめこんだまゝ走り出した。樹が飛ぶ、電信柱が飛ぶ、おしめが飛ぶ、がた／＼した借家が飛ぶ、鐵筋コンクリートが飛ぶ。

時々電車は激しく左右に搖れるので、吊革でもと思つて手を出したが、人の頭や肩を越えて私の手は其處まで延びなかつた。一つの吊革に白い手黑い手が二つも三つも飛びつくやうた格恰でくつついてゐる。

私は懷ろにある雜誌、私の生活にとつては唯一の指導者である「戰旗」をとり出して讀もうと思つたが、人間を詰め物にした此激しい混雜の中では、到底讀書どころのさわぎではなかつた。仕方なく私は背のびをして自分と同じ詰め物の仲間を見渡した。會社員・學生・軍人・敎師・勞働者・商人――ラツシアワーの車內には色々な詰め物がそれ／＼の役目をもつて乘りこんでゐた。

學校へいつて純眞な生徒に嘘を敎へる先生、反動の手先となつて貧乏な兵卒達にそのキヨウダイを殺させる將校、今日も亦一日搾られて、夕方にはひからびて歸る月給取り、あいつを賣りこいつを賣つていくら儲け樣などと思つてゐるらしい小商人、大切な時間と金と精力とを浪費して時代後れのブルヂヨアイデオロギーをつめこみにゆく學生たち。體の頑丈な手の黑い勞働者――。

電車は走る。素晴しく速く走る。何故こんなにも速く走るのだらう。譯の無い筈はない。立派に譯はあるのだ。出來るだけ早く走らせて、出來るだけ能率をあげたいのだ。誰が？資本家がだ。資本家といふ奴は、人喰鬼が人をほしがる以上に、能率といふものをほしがつてゐる。といふのは能率をあげればあげる程自分の懷ろが肥えるから。

資本家は自分の懷ろをこやすために、政治屋を雇ひ、警官を雇ひ、軍人を雇ふ。雇はれた者達は忠實な番頭としてブルヂヨアのために働きます。卽ちその人達は我プロレタリアにとつては少しの利益もないどころか、全く敵の外の何者でもないのです。

私はふと軍人と勞働者とが一つの吊革にぶら下つてゐるのを見てハツと思つた。そしてやがて、必らず來るであらう或

日の出來事を想像せずには居られなかつた。

今は一つの吊革にぶら下つてゐる此二人の人間は、それ〴〵まるで違つた大きな集團に屬してゐる。一つの集團は歴史を後ろへ歩かせ樣とし、一つの集團は歴史を前へ進めやうとする。一つの集團は極めて小數の資本家の利益をためにのみ奉仕し、一つの集團は激しく壓迫されてゐる全世界のプロレタリアートの解放のためにはたらく。現在この二つの集團は、一日々々とその對立の度を深めていつてゐる。それは今の社會が持つてゐる全く相反した二つの力である。社會は今大きな飛躍をとげるために、二つの矛盾した力をその中にもつてゐるが、やがてこの二つの力は材木や、荷物や、敷石やトラック等をしつかりと積みあげたものゝ兩側に相對するのだ――。

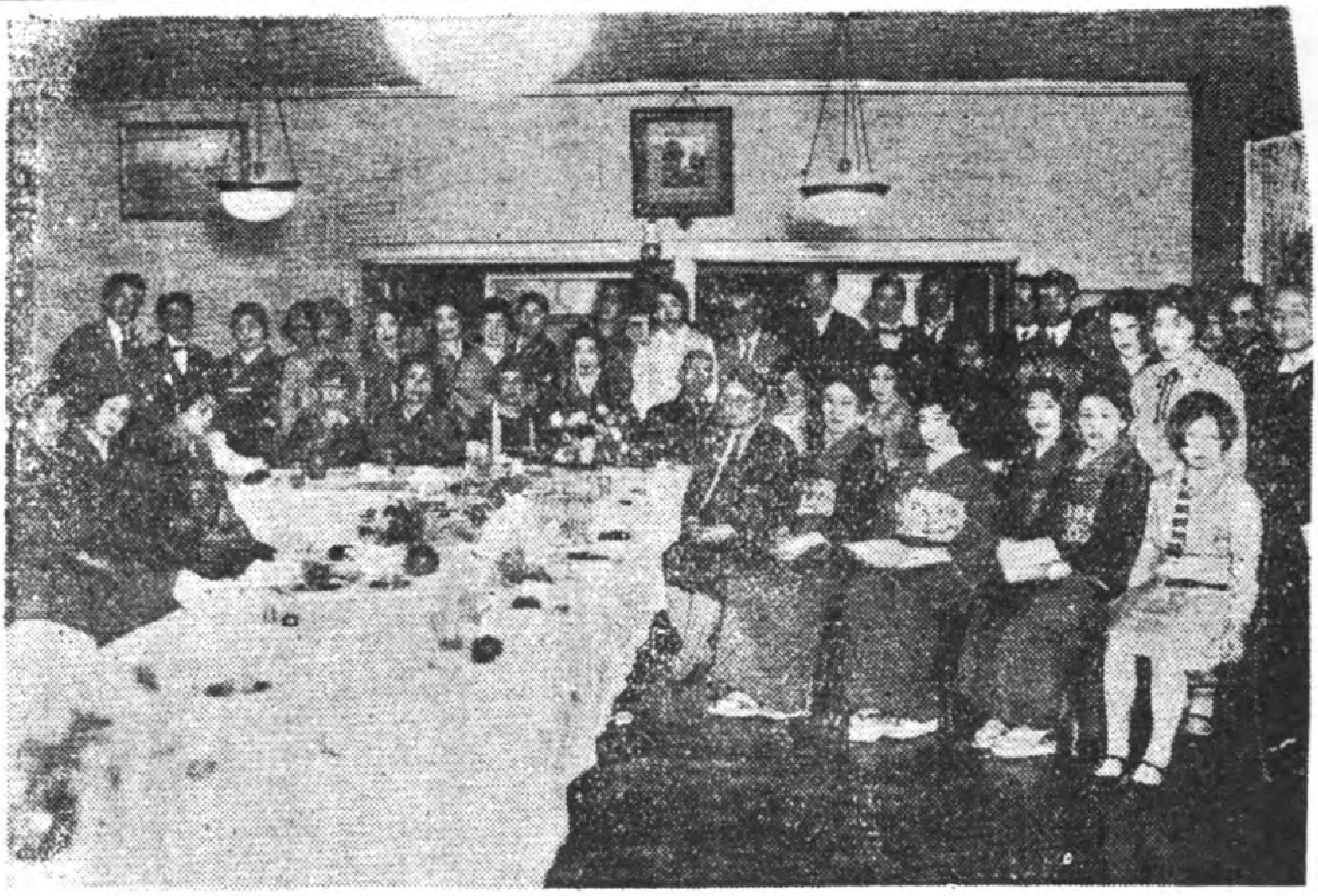
一つの吊革に無言のまゝぶら下つてゐる勞働者と軍人――その人達はやが立つべき、それ〴〵の階級がもつ必然的な運命を自覺してゐるのかしら。

省線電車は、熊手の樣に街の中からも街の外からも、大勢のプロレタリアをかき集めて、これをそれ〴〵の搾り機械(即ち會社とか商店とか學校とかビルディングとか言ふもの)

の中にぶちこんで、かすになるまで搾りとるのです。今の社會のどんな建物の中へでも行つて見なさい。搾り機械にかけられてうめいてゐる人間共の聲が必らず聞えます。そしてその人間が一日〴〵と蒼白く痩せこけていくのを見るでせう。

省線電車が果して文明の武器であるならば、私達の生活は決してこんなに苦しい譯はない。私達がお互に、私達自身、即ち全プロレタリアートの幸福のために働いてゐるのならば何うしてもつと、同じ電車にのつてゐても、生々とした顔つきを喜びを、その身に現はしてゐない譯にいきませう。私達プロレタリアは何時も私達の仇のために働いてゐるのだ。その證據に私達の仇は一日々々と肥え太つていくのに、私達は一日々々と痩せ細つていくではないか。

現代の社會では、省線電車ばかりではない、すべての交通機關がプロレタリアを搾取する資本家の魔の手だ。私達はそんなものに乘せられて、自分達の生命を亡ぼしに通ふのは嫌だ。早く自分達プロレタリアの手で自分達眞に働く者の幸福のために、あらゆる交通機關を動かさなくてはならない。光、あるその日のために私達無産者は、しつかりと腕を組み合つて、進まなくてはいけない。



「燃ゆる頭」出版記念會

——(中央正面が生田花世女史)——

生田花世さんの「燃ゆる頭」を讀む

吉田信子

生田花世さんの創作集「燃ゆる頭」が最近出版されました。

生田さんは世間も周知のやうに詩人生田春月氏の夫人で、これまで詩小說隨筆をものされ、文藝家として、明治の終りから大正、昭和の時代にかけ長い間まめ〳〵しく活躍せられてゐますが、一面時代の動き、特に婦人運動に多大の理解と關心を持つて、この方面にも力を盡されて來ました。

明治の終り平塚らいてう氏が旗上げした「青踏」に作品を發表されたのを始めとしてその後「ピアトリス」「處女地」「ウーマンカーレント」「婦人運動」「女人藝術」等等、その時代の主流雜誌を舞臺としてゐられます。

「燃ゆる頭」は生田さんの過去十年間の步みの跡を集めたのだらうですが、私はこれを讀む時、生田さんが今日まで步いていらした道——人生に對しても、社會に對しても眞面目に血みどろになつて苦鬪したその足跡をかへり見て、十年前の女性が社會的にうけた壓迫やその社會に出る事の困難をつく〴〵考へさせられました。

今でこそ婦人が職業を持つのは常識となり、その分野も擴張せられて世ゐますけれど、「燃ゆる頭」を通して見ますと著者が職業婦人としてに立つた頃は、一人歩きする女性を白眼視し、むしろこれに侮辱や迫害を加へようとしてゐる者さへあつたやうに見えます。

又今日でこそ實力があれば社會に出るのは比較的たやすくなりましたが——といつても男性本位に形づくられてゐる現在の社會では男子にくらべるとまだ〳〵不利な立場にありますが——生田さん達の時代の方は、こんなに迄、壓迫と無理解に惱やまされたのかと思はれました。

して見ると、十年間に日本婦人の社會的解放は全くめざましい迄鮮やかに發展して來たのを思ふのです。

生田さんが小學敎師、婦人記者、その他の職業婦人として、けはしい生活戰線に立つて、道もない雜草の中をかきわけ〳〵して進んだ男敢さに敬服すると共に、この意味から云つても生田さんはたしかに女性の先驅者、又婦人職業の開拓者でありました。

「燃ゆる頭」一卷には近代的な諸要素や明るい色彩を求める事は無理でありますが誠に、こまやかさ、質朴純眞な力に充ちて、讀む者をぐん〳〵捉へてゆくと共に、私がこれまで讀みなれた創作とは違つた味のものでした。

こゝに描き出された女性の苦しみと、その女性を押し流す時代の波、その時代における女性の位置は尊い血でつゞつた女性史の一頁を見る感がして特種な價値を見出します。

先づ卷頭の「燃ゆる頭」は丸の内の一會社に職業婦人となつて、務めて居たけい子が、二ケ月分の報酬を社長の河北に幾度催促しても、金拂ひの惡い河北は當然の報酬さへも支拂ひません。その月の給料を目あてに生活してゐる女が二ケ月間も給料を支拂つて貰へなくて、どうして生活して行かれませう。

けい子が河北に月給の催促をすると、

「私の居る時に何故來なかつたのだ」とむつつりと河北は白い目をむいて、

「あなたにさういつ迄もくつついてゐるわけには行かない」といふ。

けい子はそのこしを押へた。

「けれど十五日も待ちました、だのに御いでが無かつたぢやありませんか。私は借金があるし、色々困つてゐる事も御存じでゐらつしやる筈でございます。今日こそ頂き度う存じます」とはつきりと彼女は云つた。とバネのやうにはぢけて來た河北は

「バカ！」と叫んだ。

「バカ　何をいふ。——この生意氣女」拳をふりあげて叫んだ。

おゝこの暴壓！　この侮辱！

何と勝手氣ままな雇主の言葉でせう。

これ程不當な仕打ちに對して、職業婦人はどんな方法に出て行けば好いのでせうか。

けい子のやうに純に一直線に惡辣な雇主に對抗したつて、それは自らを傷つけるばかりではないでせうか。

この頃新聞廣告を利用して、社員を募集し、存分働かせたあげく何とか文句をつけたり、逃げ出さねばならないやうに仕向けて、次から次へとその方法で無賃で働かせる所もあるさうです。

こうした實例を見る度に私は職業婦人が團結して、その大きい力で惡雇主に向つて行かねば、結局はいつ迄もこんな不當な有樣をくりかへしてのみ居なければならないと思ふのです。

「秋の或る夕」は婦人記者の就職口を決めに行く爲め新宿から電車に乘らうとして、ふとお金を落したのに氣がつきました。しかもその金は五十錢足らずではありましたが、宿の女中から用立ててもらつた大事のものでした。長い生活苦闘に疲れた彼女は落膽し、茫然として身も心も全部が沈み果てゝしまふのでした。

疲れ果てた體をばつたりと電柱になげつけるやうにして、ぼんやりと秋の夕雲を見上げると、きゝわけのない涙がさめ〲と流れました。と巡査が不思議さうに彼女の前に立止まつた。交番へ行つて、色々話して巡査から――話の中で巡査と彼女とは同縣人であつた事がわかつて――電車代を借りるやうになつたのです。

又「早春」は或婦人記者の生活を描いたもので、

「私がこの仕事に不適當で、だん〲働けなくなつて行くのは、あなたも御らんの通りでせう。それに又私は家で仕事をして良人の生活と一緒にならなければならぬ事情になつて來ましたから。退社しなければ私は段々苦しんで、硬張つて棒立ちしちまふでせうもの」と主人公の田代子は云つてゐます。

私はこれらを讀みながら、職業生活と家庭生活の矛盾、社會對職業婦人のみぢめな不條理な奮闘生活の記錄を見せつけられて胸が痛みました。

こんな苦しみと惱みの中でもがき切つた幾多の女性の血祭りで、今やうやくに女性の上にも明るく、朗らかな生活の曙光がさして來ました。

しかし、社會は常に動き、難所は次々に横たわつてゐます。資本家が膨大な腹をます〲肥え太らせて行く時、その裏には多くの無產者が深刻な生活難の波におそはれて居ります。

無產婦人は社會上の不合理や家庭生活の桎梏、男性の壓迫の外に更に經濟上の苦しみを背おつて立たせられるやうになりました。婦人が特に生產婦人が本當に心から微笑める日まで私達はまだまだいくつもの道を越さねばなりますまい。

「燃ゆる頭」は今日までの女性の赤裸々な姿の記錄として、世に出たのを尊く思ふと共に、著者が更に新しい時代を惱み、新しい時代と共に健やかに歩いていらつしやいます事を祈ります。

若き日本の女

生田春月

若き日本のふたりの女、
この四つの冴えた眼よ。
運命の不思議な導きから
ふと相見た人よ、君達を見るとき、
戀の詩人も戀を忘るる。

深い青のマントにつつんだ
きやしやな洋装に、詩人は想ふ、
かの佛蘭西のアヴエニユウで
アデユする佛蘭西の若い婦人を、
ルイズ・ミツシエルと生ひ立つ人を。

前號の批評

島崎百合乃

批評などといふのも烏滸がましう御座いますが、前號をよんでの感想を一通り書かしていたゞきます。色々と澤山にありました記事の中で私を一番強く打つたのは、赤松常子さんの「メーデー片々」でありました。何故そうであるかといへば「生活そのものは、鬪爭以外の何ものでもない。鬪爭以外の何物でもない、決して鬪爭以外の何ものでもない。」といふ事を私は此頃の私自身の生活の中から判然と摑む事が出來たからであります。あの記事を讀んで私達のために具體的に働いて下さる大勢の人々の樣子を知つて、涙ぐましい勇氣を覺えました。百の理窟よりも一つの實行が大切ですね。私も來年からは蛇度々々メーデーのお仲間に入れていたゞきます。

×

それから私は伊藤部磁子さんの「環境と所有觀念」といふ記事に感心しました。其處に出てゐる兄弟それ〴〵の姿が眼に見える樣です。そして兄さんも弟さんも、如何

眞黑な外套につつんだ
たしかな肩の洋裝に、詩人は想ふ、
露西亞のニヒリストの集會に
眉あげて語る露亞西の若い婦人を、
ヴエラ・サスリッチともなるべき人を。

一人は佛蘭西で暮したこともある、
一人は露西亞へ行きたいと云ふ。
若き日本の心はいづれに通ふ、
佛蘭西のサンデイカリズム、
今は露西亞のボルシエビズム。

戰はずして、戰ひ疲れた
この弱い詩人の悔いの心に、
かすかな望みの火をかざす
新しい自由社會のあこがれと、
嚴しい團體的訓練の喜びと。

にもそういふ心持を持つ事が自然だとうなづけるのです。「人が環境を支配するのではない　環境が人を支配するのだ」と言ふ言葉をよくきゝますが、そうして言葉がどんなに深い眞實性をもつてゐるかといふ事をこうした言葉で數へていたゞいた事は大きな喜びです。言葉の理窟だけできいては何とも思はぬ事も、こうしたありのまゝの生活を通して見せていたゞくとき、其處に相當に深い意味を掴むことが出來ます。

×

私の大好きな「生活記錄」私はそれを今月も悅しい心持でよみました。そして、苦勞をしてゐるのは私ばかりではない。誰もが苦勞をしてゐるのだ。としみ〴〵思つたのです。而も本當に仕甲斐のある苦勞ならいゝけれど、案外つまらない事のために、自分の大事な時間や、神經や身體を無理に使はなければならない事が人間には多いのだと思ふと、本當に嫌になります。四月號の川口やす子さんの「百姓嫁の手記」を讀んだ時など、私は一晩泣いて了ひました。何時も私は、自分で自分の涙弱を叱るけれど、どうも涙弱い此惡癖は直りません。今

一年古き憂鬱に沈める心も
今は微笑みて、心の血を感ずる。
われを省みしむるは若い理智、
われを勵ますは若い情熱、
ふたりの友は詩人の詩をゆるす。

アメリカン・ガアルの斷髮ならで
ロシアン・ニヒリストの戀を斷つ髮、
アメリカ流の友達結婚ならで
主義につながる男女の結合、
ああ、戀の徒勞を醫やすもの是れ。

われにいのちの殘りなば
生くべき道の二つありて、
戀の詩人も救はれなんを。
若き日本のふたりの女、
四つの眼のいのち輝く。

月の生活記錄の中では高村とり子さんの文に一番打たれました。お金の工面は辛い。本當に辛い。思つたゞけでも私はぞつとする。まだ〳〵私には苦勞がそうないせいから。須藤垂枝さんの「子供ごころ」には何といふ無邪氣な子供達の姿が描かれてゐる事でせう。私達は大勢のそうした貧しい子供達のためにも、これからは具體的に仕事をしていきたい。松澤光子さんの「エス先生に」眞面目な文です。けれど私は何かしらそれを讀んで了つて大きな不安を感じました。此方はクリスチヤンらしい。素直な眞面目なクリスチヤンらしい。それだけに私は不安なのです。憎まずに祈る心、私も昔て永い間それをして來ました。そしてその結果私は自分のそうした信仰生活が、たゞ個人的に、主觀的にだけにだけしか正しくない事を覺りました。今では憎まずに祈る心の代りに、同志に對する激しい愛と、強い階級鬪爭の意志に燃えてゐます。私もやがて來るアカツキを信じて働いてゐるのです。お互に何處までも、物事をありのまゝにはつきりと、科學的に見てそこからたしかに生活をきづきませう。

新劇はどう動くか

時代が進むにつれて、演劇も亦餘儀なしに進んでゆきます。普通、「芝居」といへば誰でも贅澤品か何かの様に考へてゐたのも隨分永い事でした。然し劇場を社交場と心得たり、美しい着物を見せにゆく處を考へた時代はとうに過ぎました。

最早私達無產者は、封建制度時代の「美しい」夢やブルヂョアの華かさを憧憬れて、大劇場の前に三時間も四時間も、お腹を空かして開場を待つ必要は少しもないのです。私達はそうした亡びゆくものを追ひかけるよりも、新らしく生れ出づるものを迎えなければならないのです。

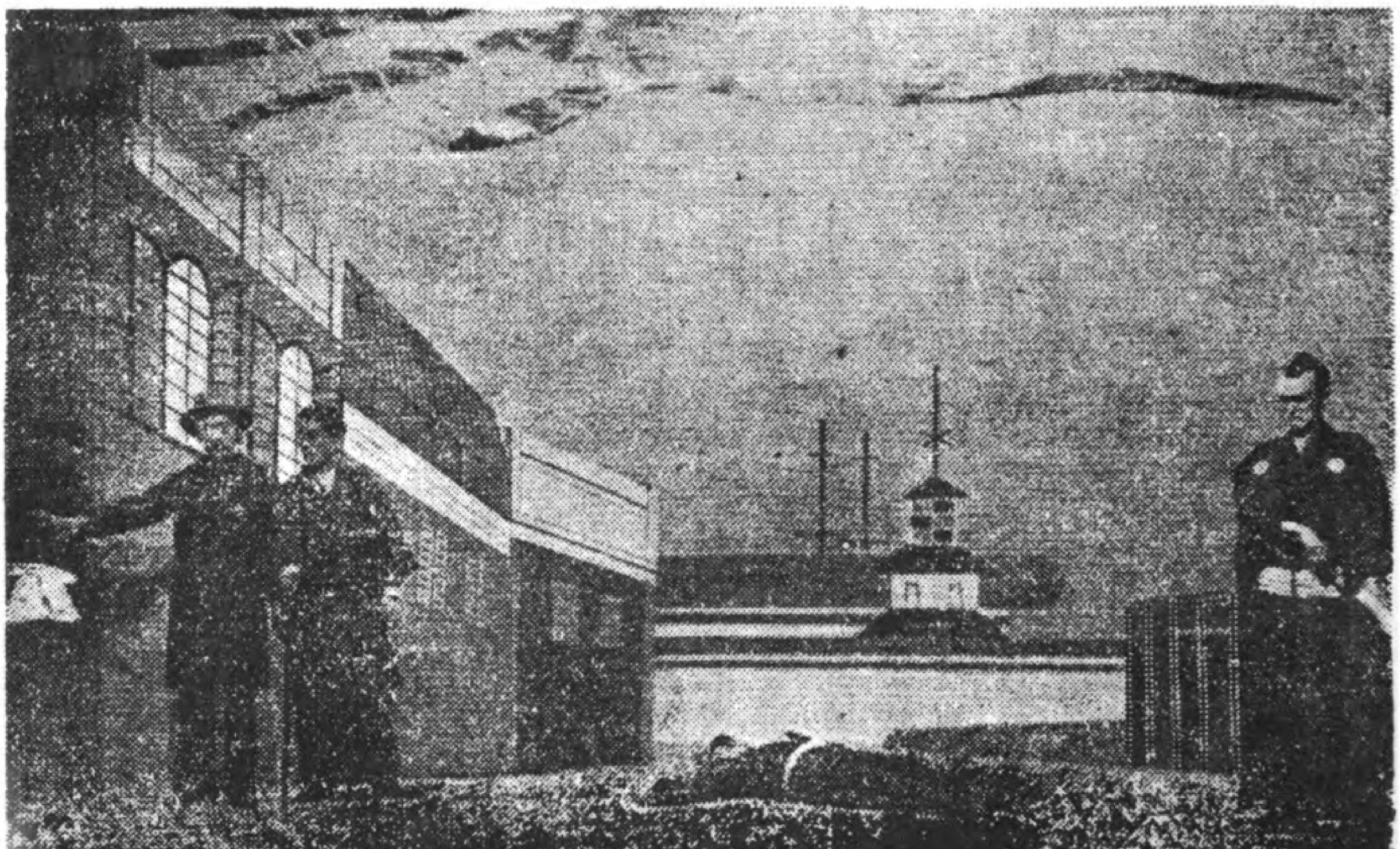
社會は全く大きな矛盾する二つの要素をその中にもつてゐて、思ひ切つた飛躍をとげ様としてゐます。斯うした時にあつては、個人解放のイプセンも、寂しい涙をもつた消極的な詩人チエホフも、遠く〱私達の後にあります。

新しい演劇、それはもう決して私達の生活の、單なる慰安ではありません。

私達は今、私達の生活の必需品として演劇を迎えるのです。時代に對してのしつかりした眼を養ひ、現實に卽した生活の方向を知り、生きる意志を强く握りしめ、鬪爭の意志を堅く掴むために演劇を觀るのです。卽ち演劇を通して、新らしく生れ出ずる全無產階級のために働らくのです。

今月は築地小劇場並びに新築地に於て、最近上演されたばかりの二つの劇を紹介します。この二つの劇團については分裂後、今尙ほ色々な批評がありますが、私達は無產婦人としての立場から、議論の相異よりも、その人達の演劇上に於ける實際運動に就いて、絶えず熱心な注意を拂つてゆかうと思ひます。

此七月號は、編輯部の組織が全く變つてからの第一號であるため、非常な多忙を極め、日本に於て勞働者農民の味方である唯一の劇壇、左翼劇場の公演が最近あり乍ら、それを紹介出來なかつた事に就いては、深くお詫び申します。



「飛ぶ唄」第一幕第一場（新築地上演）

ア・フアイコ作

「ブブス先生」

(三幕)



梗概

第一幕　卿の庭園

幕が開くと、此處は町外れにあるカルペルダフ家の庭園である。街の方から群集の呼び聲が聞えて來る。それは失業者の大群が示威運動を行つてゐる鬨の聲である。

カムペルダフ卿の妻、ステエフカが窻中の人フュイエルワリ男爵と喃々と語り合つてゐる處へ、再び失業者の示威運動の聲が激しく響いて來る。二人は驚いて家に入る騷がしい音は、ます〳〵ひどくなる。

ブブス先生が街の方からあわてゝ走つて來る。何かに怖れるものゝ樣にあたりをきよろ〳〵見廻して急いで庭へ入る。

「あゝ桑原〳〵。わしは生れてはじめて本當におそろしい目にあつたんぢや。もう一秒おそかつたら、憲兵の劍がわしの頭を眞二つにする所ぢやつた。」

ブブス先生が、獨り言をいつてゐる時、人の足音がするので灌木のうしろへ隱れる。

パアゼとその娘のテイリン及びテアが入つて來る。三人は盛にステエフカ夫人と男爵との關係を話す。パアゼは自分の娘三人に、お前達は順々にカムペルダフ卿と結婚するのだと言ふ。娘達は大喜びである。

卿がペルコウエッツ將軍を連れてやつて來る。「將軍は、一個師團が乘り込んで來るから暴動を起した奴等は皆殺しだ。」

と豪語する。ブブス先生はそれをきいて、自分を掴まへに來るんじやないかとブルブル震へてゐる。牧師や男爵がやつて來る。ブブス先生は男爵に見つかるが、男爵はブブス先生の事を、

「大學教授ブア・コレット先生」

と言つて卿に紹介する。卿は貧弱なブブス先生の事を、てつきり大學教授だと思ひ込んでしまふ。

第二幕　邸内の廣間

ププス先生・男爵・牧師・將軍がやつて來る。

衞戍司令部から電話がかゝつて來て、將軍は急いで出てゆく。

「暴動が起つたんぢや！」

將軍の報告があるや否や、牧師と卿も一しよに出ていく。

その後でププス先生はステエフカ夫人に地理の講義をはじめると、夫人は卿を嫌つて男爵を愛してゐる事をププス先生にうちあける。先生はそんなら一緒に逃げたがいゝと言ふと、夫人は大喜びでププスに接吻して去る。これを見つけたパアセが、今の事は卿に默つてゐるから自分の娘と卿と結婚させてくれと言ふ。其處へ卿もやつて來る。娘達もやつて來る。皆はピアノを彈いたり踊を踊つたりして目茶々々にさわぐ。

將軍もやつて來て、自分達は、政略上、無産黨に藝術大臣と衞生大臣とを與ふべきだと言ふ。その代り卿が商工業大臣に推薦される事になり、その上、彼等と、左翼團體との間に渡される橋の役目をするものとして、ププス先生を選む事になる。

第三幕　卿の書齋

夜中。眞暗な部屋。男爵がしのび足でやつて來る。ププスも出て來て、「やれ〳〵、市會で御座れの、大臣會議で御座れのと、あゝ何といふ忙しい事ぢや。」

と、榮職についたお陰で忙しくてたまらない近頃の生活をこぼす。歩きまわつてゐるうちに暗いので男爵と衝突する。男爵は驚いて逃げ出す。

卿がゐる事と思つて、パアセの娘たちがやつて來る。寢卷を着た卿が駈けつけて、ププスがてつきりこの娘達と會つてゐたものと思ひこみかん〳〵に怒る。砲聲が轟く！

ププス先生が「革命ですぢや。」と言ふと一同眞青になる。

もう停車場も占領され、到る所に、武裝した勞働者が立つてゐたからである。

勞働代表者と兵などが入つて來る。將軍牧師・外一同が逮捕せられて去る。

ププス先生　けがたつた一人、暗い書齋に殘される。

——幕——

解説

此三幕ものゝ喜劇は勞農ロシア劇壇の新人、ア・フアイコ氏の傑作です。一九二五年一月二十三日、メイエルホリド座でこれが上演され、非常な成功をおさめました其後幾度となく上演されましたが、何時も非常な好評を得てゐる作品です。

小學校の先生ププスは、二つの相闘つてゐる階級の間によろめき、階級闘爭の嵐の中に、自分自身の立場を失つていきます。ププスがそんな風になつていくうちに、一つの階級は亡び、他の一つの階級は勃興しました。

亡びてゆく階級は、贅澤、肉慾、厭倦、自負に滿ちてゐます。然し一方、新らしく興つて來た階級は健康で溌溂としてゐて、何處までも淸新であり、且戰鬪的です。

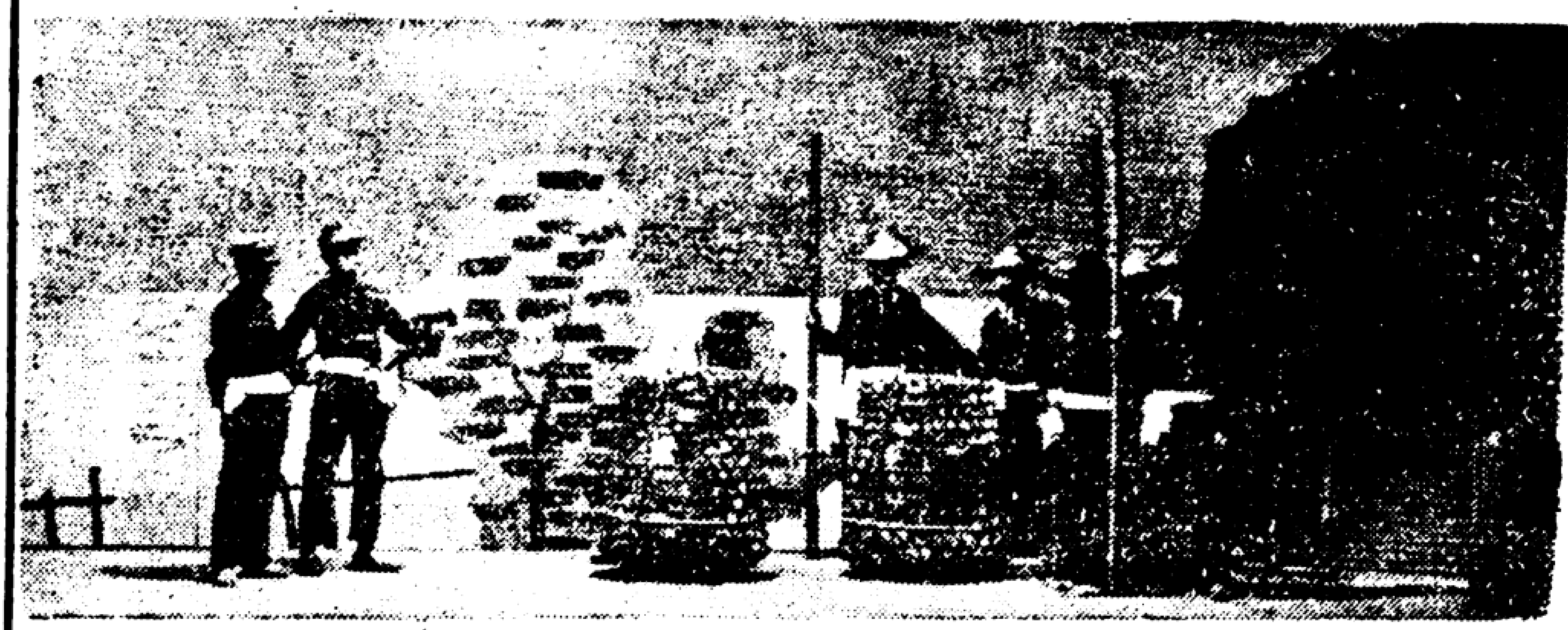
ププス先生と一しよに沒落するか。

新興階級と一しよに生きるか。

これが喜劇「ププス先生」の現代人——殊に小市民階級に提出する、一つの重要な問題であります。

金子洋文作

「飛ぶ唄」(三幕六場)



梗概

作者を縛るより風を縛れ

第一幕　第一場。明治初年の築地の往來

表面は文明開化、國民平等の世でありながら、徳川の領から解き放たれたばかりの民衆は、再び薩長藩閥の新らしい枷に悩まなければならなかつた。その頃、誰ともなく歌ひ出した時勢諷刺の俗謡は、官憲の壓迫を遙かに超えて、風のやうに四方へ飛び、忽ち全都の流行となるのであつた。

巡邏の隊長に追ひ廻はされながら、禁令の唄をひろめて歩く三吉といふ子供は、何か唄の作者と關係があるらしい。浪人遠山も、禁令の唄をうたひ歩く。

彼は血眼になつた隊長に詰問される。で「唄を流行らすのは、風だ、時代だ。作者を縛るより、唄をふり撒く風を縛れ。」と嘲笑する。

かくれ家

第一幕　第二場。遠山の家。

柳橋の富本の師匠照吉を相手に、遠山は盃を重ねながら、新らしい替唄の文句を練つてゐる。

彼のもとにゐて唄をひろめて歩く三吉や遊び人が歸つて來て今日の見聞を報告する一同が密議を凝らしてゐるところへ、立川が訪ねて來る。彼は嘗て遠山と一しよに、封建時代の遺された無用な制度を、徹底的に叩きつぶして、人民の政治を作らうと誓つた同志の一人であつたが、今は政府の役頭人井村のもとに働いてゐる。

三年振りに會ふ嬉しさをのべると、彼は遠山に向つて、その才能と手腕とをもつて政府の役人になれ、と熱心にすゝめる。遠山は言ふ。

「たとへ徳川の勢力は驅逐しても、大名を華族とし、武士を士族とした革新の第一歩は全く誤つてゐる。薩長の藩閥は富商と結び地主と手をとつて、ます〳〵人民から搾りあげるではないか。俺は飽くまで人民の爲に働くのだ。政府の奴等とは何處までも對抗して立つのだ。」

言ひ放つた鋭い言葉は、立川の胸に何か重い響きを與へた樣である。照吉の富本を

きゝながら、遠山は情人照吉の身邊にも、鷹の手がのびた事を知つた。

維新革命は農民を裏切つた

第二幕。柳橋の旗亭名倉の座敷。皎々たる秋の月夜である。役人頭の井村は遠山に酒をすゝめる。

「君は珍らしい藝術天才の持主だ。然し何故そう政府の惡口ばかりを歌ふのだ。今その才能を逆用して、施政謳歌の唄を作つて異れたら、革命の仕事は一層有利に展開するに相違ない。」

井村は熱心に遠山を說いたが、唄の作者は頑としてきゝ入れなかつた。

「自分には何の天才もないのだ。たゞ自分は、人民の胸の扉から、歌を引出す術を心得てゐるだけの事だ。政府謳歌の唄を作つてもたゞの一人だつて歌ふものはあるまい。」

遠山は更に維新の變革を論じ、革命の成就は武士階級のみの力では無い。封建の苛酷な鞭で打ちのめされた、農民の反抗と奮起とに因るところが多い。しかるに、維新の改革は、再び農民階級を、封建の泥濘に墮落したものだと罵つた。

瓦版のよみうり

第三幕　第一場。兩國橋畔の廣小路では、乞食の獨り相撲を始め、賑やかな見世物が、往來の人々の足を止めてゐる。遠山の作つた樣々な歌は今や流行の盛りである。

遠山の一味は、唄の文句を瓦版に刷つて益々街頭宣傳に努めてゐる。遠山は現場を薩長出身の役人に發見される。

群集の狼狽、喧騷、悲鳴、——遠山は白刃を潜つて逃げのびる。

第三幕　第二場。街路。亂闘。

籠の中の演說

第三幕　第三場。品川の近く。月光に照らされた美しい海が樹間に見える。

遠山の感化によつて、施政の非を悟り、役人を辭した立川が、今日唐丸籠で送られる遠山に、蔭ながら別れを惜しもうと路に、これも同じ思ひの照吉と待つてゐる。

遠山は辯舌滔々と、護送される籠の中で時局を痛罵する演說をつゞけてゐる。後の籠の三吉は、淋しくこれを聽いてゐる。樹蔭から、遠山の作つた唄が、風に流れて聞えて來る。

解　說

明治初年の官僚政治、藩閥政治を冷笑し反抗して歌はれた當時の革命歌が此劇の中心となつてゐる。革命歌がもつてゐる使命、それが此脚本の主題である。明治維新の革命には、農民の自然發生的な反抗と爭闘とが、非常に大きな影響を與へてゐた。德川末期に頻りに起つた百姓一揆はその事情をよく說明してゐる。新築地劇團は、築地小劇場から分離したより尖銳的な一團で、所謂藝術至上主義的な新劇を排して、演劇を飽くまでも正確な時代精神と結びつけ、劇場をして、一般新興大衆の最も有意な集合場たらしめ樣と、過去一切の演劇を再び批判して、在來の劇術から取りいれるべきものは盡くとりいれ、又進展極りない社會生活の中に深い技術と内容とを發見してゆき乍ら、現在の社會制度の下に許さるゝ限り劇演を一つの行動意志として、時代に働きかけてゐる「革命的」な劇壇です。

◆婦人買物帳

永榮友次郎

『六年も婦人相手の新聞記者をして居たら何か婦人にたいして註文が一つ位あるだらう』とよく友人が訊く、ソコデいろ〳〵考へるとなるほど註文らしいものが一つあるそれは何かといふに婦人は買物するときにもつと氣を付けて買ふべきであると。

どんな點に氣を附けて買はねばならんかといふに、立派な箱に入つたもの、綺麗な包裝紙にくるんだもの、體裁よく詰め合はせたもの――そんなものは出來るだけ買はぬ方針にすることだ。

今の資本主義の世の中では必要の品物を買はふとすると必らずその中味に伴ふた附帶品を一緒に買はされねばならぬ。近い話が石鹸を買ふとすると石鹸を詰めた箱も一緒に買はされる、しかもその箱はチヤンと石鹸の代價の中に包含されて居るんだから一個金十錢の石鹸は宣傳費・箱代、包紙代それにあらゆる諸經費を加算したものであるからだ。一個金十錢の石鹸の原價は三錢か四錢しかかからぬのだ。

だいぶん以前の話であるが安藤井筒堂が安藤石鹸を賣り出したときに一個十錢で賣るため贅澤な箱入りにしないといふ廣告を出したものだ。なんでもその廣告文をよんだら箱代や包紙が馬鹿にならぬほど高くかかるといふことだつた。尤も安藤井筒堂のその石鹸が高いか安いかは別であるがとにかく體裁良くするために商品には中味以外に非常に高い金がかかることは勿論だ。

そこで貧乏人はなるべくそんな中味以外の物に金をかけて、プロレタリアを搾るものは買はぬ方針にすることだ、だがそんなことを云ふとすべての商品は買へぬことになるかも知れんと思召す方があるか知れんがそんな心配は無用である。現にメートル賣り、キログラム賣りが勵行される現代である。中味だけ買はうと思へばいくらも買へます。酒の一升壜を十本も二十本も溜めたからとてそれが主婦の名譽になるわけのものでもあるまい。一度酒の一升詰を買つたら次ぎからはその壜を持つて酒屋へ行つて桝目で秤り込んでもらへばたくさんである。醤油だつてその通り、龜甲萬、山サ、ヒゲタ――そんなものをいつも樽詰めで買ふより樽に買ひ入れるといふ方針をとるがよろしい、菓子も無論その通りである。森永のピース、ミルクキヤラメルを一個宛包裝紙の儘で買はねばならんといふ原則はない。一斤いくら一斤いか程と中味だけをキチンと目方にかけて買つて來れば結構である。詰らぬ處の詰らぬ見得や體裁をとりつくらうとすると中味以外の物に高いお金をかけた馬鹿な物を買はされる。警戒すべきである。

婦人は買物するときに氣をつけねばならん、これが僕の註文である。僕は前に石鹸を例にとつてその生きた實際を示したがそうした例を逐一並らべると大變である。ソ

コテ例は勘辨して頂いてそうした立ち場から考へて頂こうと思ふ、このことを本當に考へるとやがて今の資本主義の生産方法がいかにプロレタリアにとって慘虐なものであるかといふことがわかる筈である、婦人は買物するときに氣をつくべきである、たとへ生産といふことは判らないでも消費といふ上からも――　（一九二九・六・五）

夏になる頃

高橋世都子

風の無い靜な夏の夕暮。

　英子は清乃とならんで中道半山の段々を登って行った。其處には砂利を敷きつめた墓地があって腰をかけるには都合のいゝ程度の高さだった。二人はそれに腰をかけると、磯馴松の海邊を眺め下した。空は夕やけて美しく太平洋のかなた迄染めてゐる。

　病姿の清乃はいつもの落付いた調子で口を開いた。

「それでこの後、どうして行くつもり、私はそれが聞き度いと思ってたの。」

「どうするって、別にこれと云ふ考へは無いけれど私、兎に角獨立して見度いの。寄生蟲の生活がしみじみ厭になっちまったんですもの。」

　英子の面持は沈んでゐる。

「でも獨立と云ふ事は隨分、思ったより以上に苦しいものよ。」

　女子師範を出てすぐ敎職についた清乃ではあったが、英子の獨立については、案ぜられてならなかった。

「それに英ちゃんは、からだだって弱い方だしもっと靜養する方がいゝと思ふんだけれど……」

「からだなんか或點まで心で統制して行けると思ふの。養生々々と云ってこんな毎日を繰り返してゐては心の苦痛は增々加はって來るばかりだし、色々の煩しい事を、聞いたり見たりして私は到底、心から靜養するわけには行かないんですもの。」

「さう云へばあなたの立場としてあなたに適當な仕事を、見つけてそれをやって行けばこの上無い事だけれどあなたのする事を赦してくれるかしら……」

「私の家の者が赦して吳れない事は判ってますの。私が箱入娘である事を、母も兄も親類も、希望してるんですもの。」

「それを英ちゃんは知ってゐながら、自分の魂の欲する世界へ飛び込んで行かうとするのね。」

「えゝ、さうなの私は母の心持を思ふと堪えられなくなる程、憂欝になるの。でも私の心の底からは、私の望む生活をせよ。と命令してる樣な氣がしてならないから、一時は不肖の子となっても專心やって見るつもりなの。」

「あなたのその勇氣は、頼もしいけれどそのためにからだを惡くする樣な事があっては、益々お母樣を傷付ける事になりますよ。」

「えゝ、出來る限り健康の方面にも自重し

て、私の不孝の償ひをする事にして母を安心させ様と思つてます。」

「ほんとうに、からだを大事にね。しつかりやつて頂戴。」

「ありがとう」

それから、お互の心に様々の事を思ひつゝ沈默のうちに、清乃と英子は山を降つた。あたりはすつかり宵闇に包まれ、海風にサラ〳〵と笹が鳴つた。

山下の町角で二人は、意味深く視線を交しながら別れた。

英子の胸の中には、傳統的な感情と、目醒め様とする理智とが明滅し、永い間この二つのものゝ鬪ひが續いた。それから――一年過ぎた今日、英子は曲りなりにも經濟的獨立の第一歩へと踏み出した。

世間知らずの英子が飛び込んだ塵埃で一ぱいの帝都での生活苦は、思ひしに優つて多難なものだつた。激しい現實の鬪爭は英子の神經のすべてを緊張させ、興奮させた。そしてより考へさせた。より憂欝にさせた。然し、英子は日に日に何かしら、强い力が湧いて來る事を感ずる事が出來た。英子が自分自身を第三者として考へた時、英子が今、苦痛と思ふ事は何でもない事であつた。苦痛と感ずるもの――それは英子にとつて新しい體驗であり、試煉であり、轉じて希望となり又悅びとなつた。英子は或日、清乃宛の葉書の一節に。

「私は幸福です。世の中が少々解つて來ました。私の進んでゐる道は間違つたものにせよ私にとつては、大切な生命です。あなたも是非この夏の休暇を利用して、上京して下さいませ。色々お話致したいと思ひます。」

と書いて送つた。

一週間後、清乃から返事が來た。それには、英子がさうした生活に入つたのは嬉しいがもつと委しく實生活について具體的に云つて呉れる樣にと書いてあつた。

英子は然し、そんな餘裕がなかつたし比較的、安らかな清乃の生活を思ふとさう〳〵委しい報告はしたくなかつた。

女學生上りの箱入娘から街頭の婦人となり、强い意志の下に、無產階級の眞實なる同胞たらんとする英子にとつてたゞ、努力奮鬪は文字通りに實行されねばならぬ事であつた。

多くの女性がなしつゝある、戀愛も結婚も今の英子にとつては、第二義、第三義の問題である。英子はから云ふ事から遠ざかつてゐられるのも一つの惠まれた幸福だと思つた。或一種の時代的熱病に罹つた患者として、自分を反省して行く事によつて英子は滿足してゐる。馬車馬の樣に唯一路、進め〳〵と自分に鞭つて行く姿が、英子のそれであつた。これから先、英子はどんなになつて行くか彼女自身知らないのである。信ずる道を歩まうとする英子を皆が勵まし慰めて呉れるのを、英子はどんなに感謝してる事だらう。その人々に對しても英子は決してつまらない事は出來ない。少々でも英子自身を向上させねば駄目だ。

六月の太陽は高く輝き、綠は色を增して行く。

おゝ夏。燃ゆる夏。目醒めた若人の夏ではないか。英子の活舞臺はこれからなのだ。（一九二九・六・五）

◆友に呼びかける

西しげ子

「職業婦人の家を東京へ建てるの。建設費全袋一口貳拾錢を入れて呉れない。」
「當分職業婦人に御緣がないわ。」

　深交もない友人の誰彼から異口同音に好い事です、入れましょうと今漸く滿たした三十八枚その九枚めに、六年餘をあの暗い事務室に慰さめられ慰さめて若い日を一緒に生きた親友Kから一蹴されて言ひ知れぬ淋しさにおそわれる。愛人とのマリツヂを心から喜こんでると見へて今夜は珍らしく丸髷に結つてある。二ケ月前に職を辭したとは聞いた。然し當分御緣がないと言つてのけたKの言葉は餘りにも不用意だ。私はその逃げ口を好かないあつさり結婚費用も澤山使つたので……とでも斷はられゝばまだしもうれしいのに。

　愛の形を替へる事によつて血の出る様な苦しかつた職業婦人の生活を忘れる事が出來様か。夏の宵、浴衣の裾も輕く橋の欄干にもたれて涼を求むる人達の中を袴をつけて夜おそく歸つたあの頃の事、事務上の事故があつたとて皆の前で叱られた事等々。その頃青春期のお互ひはよく職業婦人の悲哀も感ずれば希望も話して居た。

　相別れて三ケ年、過ぎ行く星霜と共に、友の職業的意識もそんなに變化したかと嘆じられる。

　顔を粧ふて美衣を纒ふて灯を漁つて歩く人達の何處に充實を見出し得られる。默々とし微かながらも未來に一線を描いて行く堅實な女性を想ふ時、その間隔の甚だしいのを遺憾に思ふと同時に呼びかけ度い、親しい友よ、携へて進まう。一段高いレベルへ向つて、おくれ走せ乍ら現代の堅實な女性と一緒に。袋を滿たして呉れなかつた貴女を責めるのではない。今一度あの頃の心に歸つて貰ひ度い。

　職業婦人として一度社會に立つた自分達は職業を辭したとて職業意識迄も忘れてはならない例へそれは對社會的のものでないとしても家に在つてその意識を持續すれば一つ一つの仕事も快なる心でやつてのけ得ると思ふ。其處には見榮もなければ虚榮もない、正しい眞理を掴む日も近い事と思ふ。

　要するに自分は無産者意識の下に雄々しくも又勇ましく社會の荒波を堅實な歩みの下に逞つて行く人達の上に祝福あれと祈るものである、とまれその心が幾萬の若い女性の味方であると思ふ時、其處には言ひ様もない五月の光りの様な愉悅がある。

　五月だ、五月、新綠の下に若人の心は躍る親しい友から受けた大きな寂漠によつて自分は斯うした無意識的職業婦人曰ゆる浮ついた職業婦人が未だ自分達の仲間にありはしないかと思ふと思はずペンを採つた、重　て微々たりとも堅實に。

　一段高いレベルに向つて友よ進まふ。何か大きな仕事が待つてる様だ。

頬笑まれる心――　　一九二九、五、五記

この頃の記録

奥むめお

消費組合で全地球を包め

消費者組合では、ひとり我邦ばかりでなく諸外國に於ても七月の第一土曜日を以てその宣傳デー、示威運動の日と定めていろ〳〵な催しをする。そして消費組合の理想をもつと廣く社會一般に廣めるために、今の商業組織の下で當然のやうに行はれてゐるところの賣る者の不正不識、買ふ者の不信や不幸について人々の反省をうながし我々の消費生活をもつと合理化するために「消費組合を以て全地球を包め！」と働きかけるのである。

今から九十年前イギリスに大變な不景氣が襲來した。たゞさへ貧しく生活に追はれ勝ちな職工たちは、不景氣の故を以て賃銀は下げられるばかり、ストライキを起して幾分の賃銀値上げに成功しても、職工の賃銀が上れば直ちに生

産費が高くなつたからといふのでものゝ値段をつり上げるために資本家に利用されるばかりで、結局益々高いものを買つて一層ひどい貧乏におちこむばかりであつた。

この時ロツチデールの消費組合の開拓者——實は二十八人の貧しいフランネル職工が毎日々々買はなければならない日常生活必需品が、賣る者の勝手に値段が定められたりつり上げられたりする限りは我々の生活の安定は永久に來ない。消費組合に依つて我々の生活の最後的安定を計らう。と、とぼしい財布をはたき合つて積立てたお金で消費組合を初めたのであつた。（一八四四年）

道を歩いてゐて思ふことは何と小賣商人の多いこと！酒屋、小間物屋、藥屋、呉服屋、靴屋、菓子屋、文房具屋下駄屋、米屋……町の繁昌とは、これらの小賣商人がお客を奪ひ合ふ爲にひしめき合つてゐるその四苦八苦戰の謂に外ならないのである。而もそれらの商店のお客の大多數は女だ。女を相手にせぬ商人といふものがどれ程あらう。一つ一つの財布はどんなにまづしく輕くとも買物の主體をなしてゐる女の財布の偉大な力を思ふべきである。

ところがこの社會的にみて實に莫大な力であるところの

女の買物が、消費組合が未だ總ての家庭の上にゆき渡らぬために、資本家、仲買人、問屋、小賣人といつた澤山の中間商人にぼられて、實に不合理にムダ多く、不當に行はれてゐる。生產者の手から直ちに消費者へ！　とはわが消費組合運動の理想である。

次に、消費組合が廉賣をするところだと早合點されるほど、その主義に反することはないのだ。消費組合は今のまうけ主義の商業に絕對に反對する。安く賣らうと、高く賣らうと、それが營利本位の商ひである限り絕對に排斥する。組合員が出資した金子で、お互の消費物資を共同購入して、而も元價（運賃その他の經費を加算したもの）では賣らないのである。これを組合の市價主義と云ふが、成べく市場なみの値段で賣つて普通の商人のまうけとするところを組合員共同の積立金として有效に使ふ。例へば更に廣く消費組合の宣傳をするためとか、組合員の教育や慰安に使ふとか、誰にでも必要な共用品を備へつけるとか、仕入れをもつて有利にするための資本に廻すとか、組合で生產加工を初めるとか云ふ風に。かうして組合を中心にして、「買ひ手即賣り手」といふ自治的な働きをなしつゝ組合員が協同共存共榮の實をあげようといふのが實に消費組合運動の主眼である。

農會立女學校を觀る

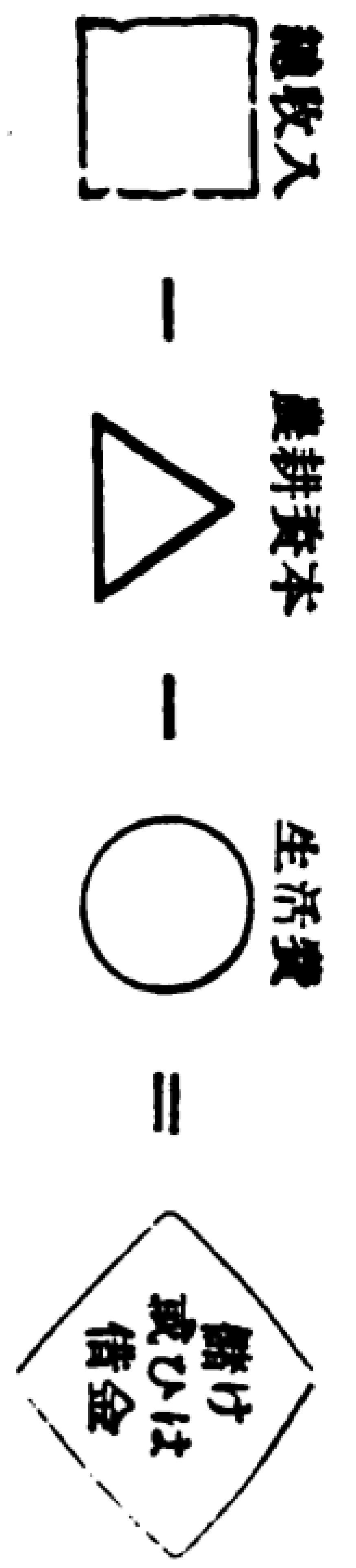
千葉縣農會で立てゝゐる家政女學校を參觀して來た。

近頃流行の女學校教育に對する不備の聲が大分社會一般の輿論となつて來たやうな觀があるが、ではどんな風にしたら最も適當か、についての對案が得られなかつた。都會地に於てはしか〳〵、農村に於てはしか〳〵、處と事情を異にするに從つてそれ〴〵に適應した教育が行はれるべきであらう。群馬縣强戶村で每年行つてゐる農閑期三ケ月（一―三月迄）の共愛女塾は他にさきんじて試みたもので、暗示されるところの多いものであるが、あそこで組合の精神を充合に呑み込んでゐる〳〵掛つてゆくいゝ指導者が早く出來てほしいものだと思はずにゐられない。

こゝの家政女學校は一ケ年卒業の短期教育であるが、校長山崎時次郎氏が得がたい理想家であるに配して、幹田せつ女史といふ熱心家が有つて、生徒と寢食を共にしつゝ云はず語らずの内に若い者を教へ導いてゆくといふ實際方針

をとつてゐられる。鹽田史は早くから婦人の成人教育のために千葉縣下の農村をあちこち廻つて種撒きして來られた篤行者だといふ。もう少しゆつくりした時間があつたらいろ／＼話して見たいことが澤山あつたのだけれど、惜しい心で別れて來た。

　云ふまでもない事であるが、この學校は特に農村の中堅婦人――農村振興のためによく働くことが出來る樣な婦女子を養成することを眼目とし、學費を低廉に、期間も短いうちに實習體驗を主にして成べく實際教育を行はうとしてゐられる。丁度農村經濟の授業中であつたが、千葉縣下農村の生活標準を題目にして、



農家の總收入を增すにはどういふ方法があるか、農耕資本（經費）を少くするにはどんな方法があるか、生活費を少してすむ樣にするにはどんな方法があるか、等々實際について、農村經濟に餘裕あらしめ、借金をしないですむ道を生徒たちに考へさせてゐられた。かういふ問題は殊に、産業組合の全般に亙る理解を與へることから進めて組合の力による協同の道に導き入れることが最も望ましいなあ、と私に思はれた。が良人が收入をもつて來るものといふ前提で家政學を教へてゐる普通の女學校とは大した差だ。

　卒業すれば、主婦適任章といふ證明が與へられる由、嫁の貰ひ手が早く、多いのでこれからこの方面の世話にも忙しからうとのことであつたが、今の所未だ／＼嫁に貰ひ手側の注文と嫁にゆく當人の希望とは一致しない場合が多いだらうから、古い殼の家庭に入つてゆく若い者を大いにはげましてやつてほしい。若い者は、新しい時代の風を腹一杯吸ひこんで生長してゐるだけに古い因習に溶けこみがたいものがきつと多いに違ひないのだから。

　新しい時代のものゝ上に力あれ。

　これからの世の中では、一人の夫の女房、一家の主婦、數人の子供の母としての覺悟だけではもの足りない。社會の一員として、社會のよりよき半分として女性的な自覺こそ、當來の社會の幸と不幸を背負つて立つべき母性の上に私は望まないでゐられないのである。

　今や婦人の教育は根底的にやり直さなければならない時

機である。

竹内女醫の禍について

最近各方面の婦人運動に關係してゐられる竹内茂代女醫が突如墮胎事件に關はりありとして上田市の警察に拘引された。世間の噂も四十五日とやら、この事件が人々の記憶からやうやく消えて失せやうとしかけた頃婦人界のあちこちで竹内女醫慰問會や、事件の眞相發表會といふのが引つゞいて行はれて女史のかうむつた寃罪を雪がうといふ努力が有力に行はれた。

輕卒なる當局の愚かな感違ひから身におぼえのない濡衣を否應なしに被せられた竹内氏が此度の事件で被つた無形有形の打撃は相當深大なものがあつたであらう。つけても事情が闡明されて公明な氏の立場が確かめられたことは何よりお目出たい。

竹内氏が友情に厚い友だちを幾人も持つてゐられたといふことは、氏のために何よりめで度いと私は思ふのであるが、然し、判で押したやうにどの人もどの人も「氏は決して罪を犯すやうな人でない。不幸な寃罪が晴れて身の潔白が明かになつたことが嬉しい」と繰り返してゐるばかりであるのはまことにもの足りない。

これは女醫といふ特殊な社會的役割を負うてゐられる竹内氏のためにぜひ再考を煩はし度い問題であるが、現行法律は、當人の健康狀態が妊娠分娩に堪えないときに限つて墮胎人工早産を許すことになつてゐるが、肉體上の事情ばかりでなく、經濟上その他の一身上の事情がどうしても妊娠分娩を許さない場合にも當然人工的な妊娠中絶を行ふことを法律は認めるべきであるといふことは、私だけの意見ではなく現代の常識であり、すでに一般的な要求になつてゐるのであるが法律が未だそこまで改められてゐないためにどれだけ多くの不幸が、未然に防がれるものが防がれずゐることか！　醫者の立場から特に有力な運動者がこのために出現してほしいと私たちは疾くから翹望してゐた。

營業的立場から考へれば、勿論法律にふれる樣な危きには立寄らず、成べく世間に患者が殖えてそれが成べく餘計に自分の診察室の戸を叩いて與れる樣にと希ふべきは云ふまでもないことであるが、今や、金儲けに汲々とした醫者ばかりが充滿して、貧しい町村や交通不便の片田舍で醫者

も産婆もゐないところが澤山あるのに、一方都會地などでは小兒科、內科、外科、眼科等々々、軒を並べて客を奪ひ合つてゐる狀態であるが、何れも、今日營利業者としての醫者しかゐないことの有力な證左でなくて何であらう。

醫者が醫者としての重要な社會的役割について自覺するところがあつたならば、徒らに患家の多からむことを希はず、病傷の不幸から如何にして社會を救ふことが出來るかに就いて充分研究し、必要を信ずる社會的保健衛生施設はこれを一日も早く實現せしめるために努力し、日々社會全般のために積極的な健康と福利增進の計を樹つべきである。そのためには、法律の改廢その他のために徹底的な運動に入る必要もあらう。

元來法律は、刻々社會事情に順應して改正されてゆくべきものであるにも拘らず、屢々舊い慣習と支配階級擁護の傳統に禍はされて不幸を招く場合が決して尠くない。かういふ場合に假りにも先覺者として社會運動の一端に連がりを持つ者が、法律にふれぬことを以て唯一の有力な身證にしやうとするやうな事であれば、賴むに足りない先達と恨らまれるであらう。

（十三頁より續く）

は大なる利害の衝突があります。

最近日支間の重大問題となつてゐる通商條約改訂問題はこの意味から仲々解決は至難であります。最も重要なものは關稅問題治外法權撤廢等の不平等條約の改訂でありますが、關稅自主權を主義として容認した今日に於て、日支間の稅率協定はなか〳〵困難である。若し支那が保護主義を採用して日本品に高率の輸入稅を課することになれば日本の對支輸出品が殆んど粗製品である關係上輸出貿易は全滅される。また支那から輸入する原料品に高率の輸出稅を課せられる事になれば、今の日本の工業は立ち行かなくなると共に、支那に工業が勃興する。紡績業の如き日本の大產業の根底に大動搖を起すことゝなります。また十數億の日本資本家の投資は危期に頻するといふことになるのであります、加之既に支那では關東州の租借地、旅順、大連の回收を聲明して居りますから晩かれ早かれ日支の間に、必然的に重大なる滿洲問題に觸れて來るので、益々兩國間は紛糾せざるを得ないのであります。かゝる場合に立ち至れば英米が如何なる態度を取るか、ロシヤが如何なる行動を開始するかは頗る重大問題であります。



妻

並木琴

結婚の翌日、彼女達は早速二人の勤先に便利のいゝ位置を目標にして、安い二十圓以内の家を探した。けれども場所がよければウンと高いし、安いところは電車まで三十分も時間をとるやうな始末だつた。結局、二人は十七圓といふ三間の家を貸りることにした。彼女は、三年間の貯金全部――五十圓――を引き出して敷金を拂ひ、その殘金で必要な二三の家具を揃へた。

二人はそれ以外には殆ど一文もなかつた。從つて、感情が重大の要素である戀愛的な氣分は、貧乏が齎すさうした二人の生活の中には望まれもしない事だつたし、又彼女は殊に必然的な物質慾と生活意慾にのみ追はれなければならなかつたから、彼女の中の若い感情が鈍つて行くのは寧ろ當然だつた。それは、寂しくとも焦立しくとも仕方のない精神現象であつたが……。

彼女は、毎日會社のかへりに市場へ立寄つて、なる丈け安くて量の多いものを求めた。そのために或物は味の上に比較にならない程の差が感じられたけれど、何かしら、財布の中から出て行くものが、少しでも少くさへあれば氣持よかつた。糠味噌と鹽づけとの味が、どつちが滋養價値があり食慾を増すかを考へるよりも、先づ、どつちが經濟上彼

女のためにいゝかが第一の問題だつた。又、或味噌は高價であつたが、味がよい割合に辛くて、從つて一度の使用が少量ですむ事から、その方に決めることにし、汁の實はせいぜい三錢以下であげること、そして絕對に一食一菜主義といふ事にしてゐた。暑くなつて、御飯が餘つたら忘れずに壺に貯めてのりを作つたし、洗濯ものは、一々火を起してコテをかける代りに、生かわきのうちに、敷のしをする事にした。

それ等の仕事が、勤め歸りの、彼女には思ふ通り準備よく運ぶ筈もなく、殆ど每日の彼女を疲らせていつた。それに、考へれば考へる丈け、次々と何かしら家庭內の雜務といふのが目について限りがなかつた。それをいゝ加減に切り上げやうとしても、容易に落付いてみつしりした讀書の氣分を彼女に與へるものではなかつた。

「この上病氣でもしたら……」彼女は、つくづく嘆息して片付けものが終る頃がつかりしては、濕つぽい臺所でむくみ勝ちの足を投げ出した。

そればかりでなく、彼は彼で變な潔癖なところから、二つあるSを每日とり換へなければ氣がすまなかつたし、靴下だのハンケチだの、それ等のものを完全に整理すれば、全で自分の、自分自身に許された時間何ぞありはしなかつた。だが、さうした躁忙しい生活の中に疲勞して行く彼女に比べて、彼は、四日よりも七日とその本來の暴君ぶりを露していつた。のみならず、最近では食べものゝ味の干渉さへ云々するやうになつてゐた。彼女は第一それが不愉快だつた。なる丈け、食べものゝ事などには無關心でゐてくれる一貫したプロレタリヤの男らしい夫である事を望んだ。勿論、それは初めに於て、彼も彼女と同樣の主義である事を披瀝してゐたのであつたから、尚更、日と共にさうした言を裏切つて下らない贅言を發する事が癪に障つた。――出來丈け時間は有效に使ふやうに、そして本を讀むやうに――さういつた彼が、この頃は全で、彼女の忙しい事、疲れる事には無關心に、自分さへよければ滿足するといふブルジョア的な男の類の中に陷ちて行くのが意識された。

「私　あんまり雜用が多くてやり切れないわ」

時々そんな事を彼女が口にすると、彼はいつも「仕方がないよ、女の役目だもの」といふ風に、全然氣にもとめてくれなかつた。

「莫迦!!」或時、彼女はさうしたことにひどく愛想をつかして、三日分の洗濯ものを貯めたなり机に向つてばかりゐた。と、夫の怒り方は一方ならぬものだつた。そればかりでなく、夕飯の仕度が十分でも後れやうなら、散々いやな顔をして彼女を困らせた。「この男も一般的な從來の男の血を充分にうけて生れたのだ」彼女は、さう思つて諦めても見た。だがそれはそれとして、何とはなしにその躁忙しさが、結婚生活の表面にまで表れて行くのを意識しなければならないのが恐しかつた。

彼女は寂しかつた。彼が彼女のさうした氣持に全然無關心であればある丈け、焦々した。全で、自分一人が家庭といふものゝ維持者でもあるやうに……そして、彼女の健康は目に見えて衰へて行つた。

しかし、彼女はそれでも、結婚そのものを呪ひはしなかつた。のみならず、夫そのものも何故か憎めなかつた。只、彼女はどうかして、洗濯ものは洗濯屋に出し、臺所の仕事は少女でもおいて助けて貰へるやうな境遇になつたらと思つた。金！ ほんとうにそれ丈けが、執拗な問題として意識された。

その日、

近くの藥局から白い輕い包みを買つて歸つた彼女は、それを自分の破れかけて行李に入れると、大きい役目でもすましたやうにホツとして胸をなで下したが、その後で、日記の端に記入することになつてゐる出金欄へ、今日の買物をどうつけやうかと思案した。何故ならその日記は、夫婦兼用だつたし、變りものゝ夫が、或は嫌な思ひをするかもしれない事を恐れたから……。

「なに、どうせ構つた事はない」彼女は、少女のやうに躊躇してゐる自分の意氣地なさに氣がつくと、思ひきりありのまゝに（脱脂綿・一五）と記入して見たが、その露骨な文字からうけるものがあんまり嫌味だつたので、その部分を塗りつぶすと、今度は餘白に小さく(Home-sanitary, ¥, 15と訂正した。

彼女は、しかしその後で、それを再び讀み返して見る氣にはなれなかつた。だから、そのまゝ夫の机の上に日記帳を放り投げると、夫の部屋とは隣室の四疊半である自分の居間へ——卽ち、食堂兼、寢室兼、居間であるところの——

ほんのうたゝねの積りで、夫の歸る間を薄い布團にくるまつて横になつた。

と、同時に忘れかけてゐた異常な疼痛が――無經驗者にもこれが陣痛の弱いのではないかと思はせる位無氣味な疼痛が――彼女の下腹部を襲つた。そして、それは彼女が結婚前よりも一層激しかつたのと、更に又當然ありうべき事でもあつたので、「或は之が最後の Menses じやないかしら？」などゝ半恐しい氣持で、そつと下腹部を押へて見たりした。けれども、彼女が一瞬間想像したやうな、そこには何等の結晶らしいものゝ存在も認めることは出來なかつた。

彼女は、冷い汗をかきながら、布團の中の顔を染めて苦笑した。

「それにしても、どうしたのかしら？」

いつにもなく、一人でゐることが寂しく心細く思はれた彼女は、急に焦立だしくさへなつて、机の上の時計を見ると既に八時十分前だつた。

「A？　B？　C？」

彼女は、夫の友達の名前を中心に、最近時々歸りをおくらす夫の、今日の行動を想像しないではゐられなかつた。

とりとめもない漠然とした疑惑は、病的な今日の彼女を一瞬毎に苦しめて行つた。それは發作的に來る疼痛の苦しみと交互に、殆ど彼女を半狂人のやうに、又は中年婦人のヒステリー性神經症狀の如く、彼女の細くなつた神經を苛んだ。

「下らない、最後は一人だといふ覺悟があつた筈じやないか」

強ひてさう思つて、昂る神經を自制しやうとした。

「眠つて仕舞はう、そのうちには屹度歸つて來るし、そして若しもぐつすり眠つた自分の體を……」彼女は、エロテイツクな、夫婦に丈けは公然と許される場面を想像して胸を躍らしたが、次の瞬間、それは彼女をして冷靜な微苦笑と共に打ち消されて仕舞はねばならなかつた。

――それは、慥に皮肉な諦めでなければならない觀念であつたが。

彼女は、自分のキヨトンと陥こんだ眼を圍んだ黒い輪が鏡で見るよりも明らかに想像出來るやうな氣がした。そして、落付のない焦立だし氣な、少しの事にも神經を尖らし

て泣き出しさうになる、光りのない眼……
「男はこんな日の女をどう思つて見るだらう」彼女は、さう思ふと、男の前に出る事が嫌だつた。女の二三人もゐる會社の男何がよく女の顔色で直感して仕舞ふとさへいふ話でもあつたが……何しろ、男は女の大任のための生理的の現象を、あんまり輕んずるどころか、面白半分に觀察してるに違ひなかつた。或は又、女がその期間の苦痛をでも洩すなら、男はすぐにも、女はその通り可哀想な運命を背負はされてゐるのだと推論するのみか、次にはその事以外の、重壓された從來の婦人の地位までも運命づけやうとしてゐた。だが彼女は運命てふ言を嫌つた。殊に、婦人の現在の地位に對しては全然、運命などと諦める事を許されなかつた。

　而も其時、彼女は再び前よりも激しい疼痛が、腹部から腰部へかけて襲ひかゝるのを意識しなければならなかつた。
「おお……」力一ぱい、彼女がその部分を押へた時、ほんの瞬間ではあつたが、ボーツとなるのを感じた。そして又その後で、バンドに締めつけられた腹部が平常に復した時、彼女は、再び夫の行動を想像することに一ぱいだつた。
「お金があつたのかしら？」と彼女は考へて見る。僅に穴のあいた十錢玉が三つはあつたに相違なかつたが、それ以外にある筈はなかつた。けれども、友達何かに誘はれると無一文だつて平氣だし、萬一惡友にでも誘はれやうものなら、それこそ藥品までも分割して遊びに誘惑するのが、男の世界にあり勝ちな事であつた。
「まさか？」
彼女は、しかしすぐさう苦笑で打ち消しても見る。だが又それと同時に、或男からきいた言――新しい女に接する興味――を思ひ出すと、今度は淡い嫉妬を超越して、男の莫迦さかげんが唾棄したいまで愛想をつかし度くなるのだつた。けれども、その心理にしても解剖すれば、滿更どうなつても構はない男でない限り、無關心であらう筈がなかつた。
半時間、二十分と延した夕飯の膳部が、されも莫迦らしいといつたやうに、冷めきつてゐたが、純白の西洋皿に美しく彩られた野菜サラダは、どう思つて見ても、若い疲れた食客を迎へるに充分の資格を具へてゐると云へた。そして、それは恐らく彼女が初めての、無上の御馳走の積り

だつた。
「食べて仕舞はう、あの男何ぞ何時歸つて來るかわかりやしない、自分が欲しければ例へ人が疲れてゐやうと、時間的にまで要求する癖に、切角暇をつぶして拵へても歸りもしないのだから……」
　彼女は、さうつぶやくと、思ふやうに動かない重苦しい體を起して、荒々しく布團を隅の方へ押しやつたが、その時意識の上には少しも感じない食慾が、咽喉のあたりで頻りに唾液を拈出してゐるのだつた。
「何て男は勝手なんだらう、自由といふよりは、あんまり浮氣なエゴイストであり過ぎる、一歩出れば家庭の存在は勿論のこと、妻との約束何ぞ思ひ出しもしないのだから、否、そればかりでなく、若しもそれが反對でゝもあらうものなら……實際に忙しい公用で後れたのにすらあの通りなのだもの」と、彼女はそこまで考へて來ると、恐らく自分の夫ばかりではない多くの男の、それ程にも家庭の中で振舞はれる特權がどこから來るのであるかを思はないわけに行かなかつた。その癖に、彼女は會社の歸りを後らして、夕飯をすつほかしたり、用がない限りボカボカ出かける事によつて、その結果が夫を侮辱するやうな破目になる事は絶對に避けやうとした。男はそれを女にのみ當然のことだとするかも知れなかつた。しかし、家の敷居を越えさへすれば、完全に社會人として解放されるのだといふ、それこそ當然の理論を、大袈裟に主張する男の周圍の女に、同樣の理論が通用しない筈はなかつた。只、習慣づけられた概念が、女をして殆ど自然にさうさせる丈けだつた。
　彼女にとつて、夫婦間に於ける自由とは、二人をより幸福にするための、換言すればより健全な愛の完成を前提とするための自由であらねばならなかつた、從つて、客觀的に當然なさなければならない場合の仕事に對しては、全く時間空間の、狹苦しい束縛から解かれうる事を欲した。彼女は、常にエゴイズムとフリーの形式を混同することを嫌つた。そして遂に、家庭生活は一切のエゴイズムが仇であるべき事を知つた。
　妥協――その言は古いかも知れなかつたが、一つの完成へのプロセスとしての妥協は、充分に必要であるべきだと思つた。
　彼女は、結婚が或一部の人達のやうに、愚にもつかない

性的享樂所であるとは勿論のこと、單なる二つの異性の偶然の落先であるとも解釋したくなかつた。

尤も、結婚の歴史を科學的に研究するならば、結婚はあまりに女にとつて有り難い形式ではありえなかつたが……然し、彼女の言はんとする結婚とは、習慣づけられた過去の慘な形式とは、否、全然それとは內容を異にする、卽ち文明人にあつて、それは最上にして無限の愛の交換の結果として、より大なるものを生み出さんがための結婚であらねばならなかつた。

「まあ！」彼女は、呆氣にとられたまゝ、自分の夫の忌はしい行爲を目近に見た、むらむらと湧きかへる嫉妬……だが、彼女はそれ以上に、その憎むべき男を夫として、當然の如く貞操をつくすことの、女としてどれ程侮辱であるかを思つた時、勝氣な彼女は、正に發狂せんばかりだつた。

「お止しなさい!!」

彼女は、狂的な泪ごゑと共に、淺ましい存在を曝す夫を憎惡の最上の鋭い眼光で睨みつけた。が然し、彼女の言何ぞには何らの權威をも認めないやうに、依然として夫の行爲はつゞけられる丈けだつた。

「汚しい！」

昻奮の頂天でさう叫んだ彼女は、狂女の如く髮を振り亂し、そして女の膝の上に戲れる夫をめがけて猛進すると

「命！ 殺して仕舞へッ!!」

そして、手近にあつた器物をひつ摑んだ拍子に、所定めずその一撃を夫の上にうち下したと思ふ瞬間、

「どうしたんだ」急に冷い表情にかわつた夫は、敏捷にも的をはづれて、あだかも征服者の誇りを有つキングの如く彼女の細い腕をしつかりと囚へると、もの靜かに彼女の黑髮の上に輕い接吻をさへ與へるのだつた。

「おお……」よろけるやうに全身を夫の腕の中に委ねた彼女……だが、その瞬間から遂に自分の力を全く失つた彼女であつた。

而もその時、呪はしい夢を破つて襲つた疼痛は、再び彼女を恐るべき現實の中へ追ひこんでいつた。

彼女は、薄暗い朧げなその現實の中に、酒氣を僅に殘した夫の存在を意識した。

「ああ……」無意識に洩れた彼女の吐息に、逞ましい腕を

彼女の頭の上に伸した夫は

「どうした、頻りにうなされてゐたね、怖い夢でも見たのかい」といつた。

だが、彼女はその忌はしい夢の記憶を打ち消して、夫の言に素直に答へることは出來なかつた。彼女は、眼を閉ぢたまゝ動かなかつた。

交叉する夢と現實との間を狂ほしく彷徨ふ彼女の神經は勿論その二つのものゝ焦點をはつきりと認める事が出來る筈もなく、邪推は想像から盲想を越えて、限りもなく彼女を悩まして行つた。

と、夫はそれ丈けの言を殘すと、極めて平穩な鼾と共に深い眠りを貪つてゐるのだつた。――それは、抱擁に疲勞した空な肉の殘骸でゞもあるやうに。

彼女の、病的な昂奮と焦燥は容易に彼女を眠らさなかつた。そして、夫の呑氣な鼾を側にきゝながら、幾度か眼が熱くなるのを覺えた。

それは、彼女が處女時代に考へるさへ莫迦らしい徴細な問題であつたかも知れない。而も、その頃に考へられた單純なるものは、全く個人の自由をのみ前提とする破壞的理論であつて、それを夫と妻との直面した現實問題として考察する時、それは只、單純のみの單純では決してありえない筈だつた。

婦人の地位を擁護するための運動は、決して男と女の表面の鬪爭によつて、又は家庭と結婚の破滅からのみ、有利に獲得されるべきものではなかつた。と共に、家庭婦人の自覺といふ事は、獨身婦人の、偏狹になり勝ちな理論を越えて、最も重大でなければならなかつた。

彼女は、動もすれば愚痴に陥らうとする自分自身を、泪の乾いた理智の上に見出した時――それはあまりに男を頼らうとする女の弱さの現れが――一時的の病的昂奮であるとは云へ、堪らなく寂しかつた。

「こうして遂に自分までも、一生を終るのではないかしら？」と、それも不健康な時の心理狀態であるセンチメンタリズムは、彼女の未來を造る堅固な土臺であるべき筈の結婚さへ、滅茶々々に混惑をのみ與へるやうな氣がして、心を落付ける術もなかつた。

その翌朝。

彼女は、昨夜の夢や何かで氣が沈んでならなかつた。

「どうしたんだ。今日も不機嫌なのかい。」

味のうすい味噌汁をすゝりながら、夫は嫌味らしくいつた。

「體が悪いの」彼女はさう言つたが・夫の冷やゝかな言の調子から一層暗くされるのを感じた。

「困るじやないか、そんなに暗い面をされちや、モダンボーイちやあるまひし、女の機嫌何ぞとれないよ。」

「…………」

女が氣分の朗らかな時に丈け自分の慰めとした男は、女の生理的の憂鬱に對してさへ不平を云はうとするのか？

彼女は、呆然として夫を凝視するばかりだつた。

「今日は歸りがおそいよ、友達がおごることになつてるんだ、時には御馳走も食はなければ」彼は、出がけに後を向いたまゝさう云つた。

「さう」

そして彼女はその後で「いゝわ、構はないわ」とつぶやいたが、普通でさへ昂奮し勝ちな精神狀態である丈けに、夫の皮肉な言がどうしても忘られなかつた。然し、それでも一定の量丈けの泪が出て仕舞ふと、客觀的な批判が出來るまでに平靜になれるのだつだ。

「時には御馳走が食ひたいつて……？」

それは確に偽らない夫の慾望であつたに違ひなかつた。

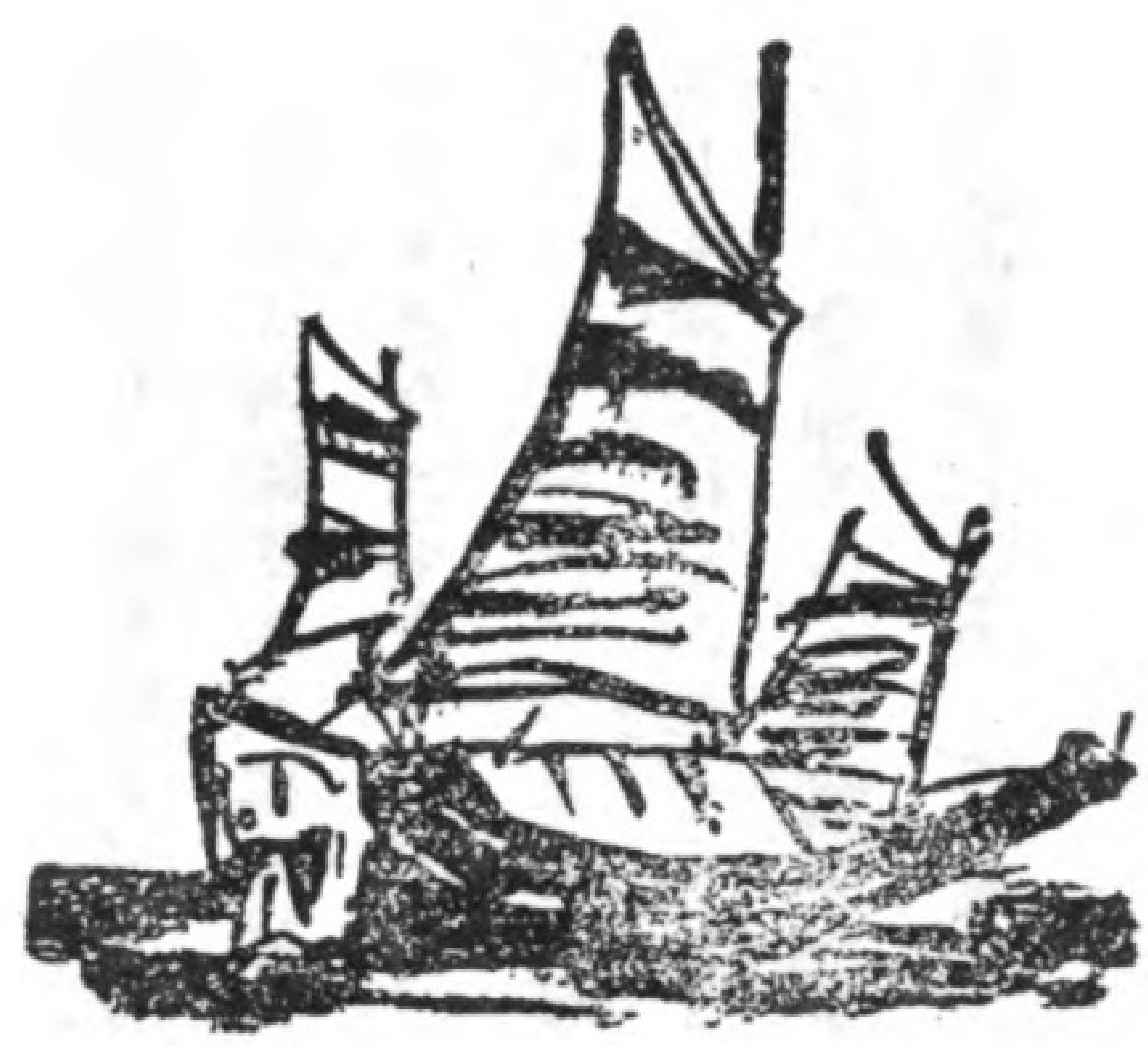
だが、考へても見るがよい、限られた自分達の收入の中で、一體この上何が出來やう。彼女は、さう思ふと、勿論夫ばかり憎む氣にもなれなかつた。

「郵便！」夫が今先出て行つたばかりの玄關で聲がした。

彼女は、急いで土間に落ちたソレを拾ひ上げると、急に胸を打たれた。

「えツ！」

彼女は。白い封筒の中から現れた退職命令を握りつぶすと再びめまひを生じてそのまゝ破れた障子の側へ倒れて仕舞つた。



ムツイリイ

丸山秀平

これはロシヤ文學の母と呼ばれる**レールモントフ**の叙事詩の翻案である。ムツイリイはグルーヂヤ語で、日本の寺院の小僧といふ意味である。內容は現代とは可成りかけ離れたものではあるが、併し、十九世紀初頭にロシヤに勃興した個人主義的ロマンチーズムの破綻を示してゐる點に於て、現代の思想と對照される場合、非常に深い暗示をと與へるものと考へる。

一

あまり昔のことでもない、姉妹の様な、アラーグワ河とクラー河の二つが合はさつて、聲をひゞかせて流れてゐる處に、一つの修道院があつた。

今もその邊を通る旅人は、山蔭から壞れた門の柱や塔などを眺めて、もつときちんと建つてゐたその昔を偲ぶ事でせう。

まだ、形ばかりの丸天井は見えるが、もうその下では、芳しい香も煙らず、聖像に向つて祈禱する僧侶等の、厳かな讀經の

壁も聞えない。

今はたゞ、世の中から忘れられてしまつてゐる、腰の曲つた老人か、この廢墟を守り、墓場の掃除をしてゐるばかりである。

二

まだその修道院が、榮えて居た頃の或日。ロシヤの將軍が、チフリスを目指して山の中を進んで行く途中、ふと、その修道院の邊を通りかゝつた。

將軍は、コザックの捕虜を一人連れてゐた。捕虜はまだ六歳ばかりの子供で、長い旅の苦勞に到底堪へられなく、とう〳〵病にかゝつてゐたのであつた。

少年は、山鹿のやうに、怖氣やすく人馴れず、蘆のやうに弱々しかつた。

しかし、その時の捕虜の身である苦しさが、その心に、強い力を呼び起した。少年は、どんなに苦しくともじつと堪へて、小さな脣から微かな唸聲さへ漏らさなかつた。

彼は確く口を閉ぢ、たゞ頭を振つて食物を拒み、靜かに、傲然と死を待つてゐた。

それを見た一人の僧侶が、非常に哀れに思ひ、將軍からその病兒を貰ひ受けて、修道院で養育することにした。

少年は、少しく自由もない捕虜の身から、親切な僧侶の手に救はれて、仕合せにも神聖な修道院に住むことになつた。

が、初めの中は子供らしい遊びにも耽らず、人々から逃げあるいては、獨り默つて、寺院の中をさまよつてゐた。

しかし、間もなく堅苦しい修道院の暮しにも馴れ、その地方の言葉も覺えるやうになつた。そして洗禮も受け、年頃になると、一人前の正僧にならうとさへしてゐた。

ところが、秋の或夜、突然彼の姿が修道院から消えてしまつた。

修道院のほとりには、山々に沿うて、暗く茂つた森林が、何處までも延びてゐる。
人々は三日の間、手を分けて彼を捜し廻つたが見つからなかつた。やうやくのこと四日目に、草原に氣絶したまゝ倒れてゐるかの逃亡者を見つけて、再び修道院へ連れかへつた。
人々は彼を看護した。そして、逃亡の理由をいろ／＼と尋ねたが、何を尋ねても彼はおし默り、寢臺の上に横たはつたまゝ日毎衰へてゆくばかりであつた。終焉もいよ／＼迫つてきた。
その時、昔彼を救つた老僧が、彼の枕邊に近寄つて、靜かに諭し、神に祈を捧げた。
それを聞き終るや、彼は少しばかり身を起し、あらん限りの力を集めながら、次ぎのやうに、老僧に物語るのであつた……

三

「神父さん！ 私の胸は長い年月、修道院の厚く、高い壁の中に住みながら、無理に押へつけられてゐたのでした。然し若い私の胸の中には、蛆蟲のやうに情熱が湧き起つて、私の心を激しく燃え立たせるのでした。情熱は、私を息苦しい、心にもない祈りをあげねばならぬ修道院から誘ひ出して、様々な驚きや戰ひに滿ちてゐる、不思議な國へ連れて行きました。
私はその情熱を、月も星も、まして太陽も照さぬ暗い修道院の中で、人知れず涙を流しながら育てました。それ故私にとつて、その情熱よりも大事な尊いものはなかつたのです。私はその情熱の命ずるまゝに修道院を拔け出しました。だから、再び此處へつれ返されましたが、私は、自分がした事をちつとも悔いようとも思ひません。又赦しを受けようとも思ひません。

四

「神父さん！ わたしはあなたの御恩を決して忘れはしませんでした。」
が、どうしたわけでしたらう。心はまだ子供でありながら、運命によつてわたしは僧となりましたが、修道院の中に暮して

ゐても、何の喜びも知らず、わしたは嵐にもぎ取られた木の葉のやうに孤獨で、いつも氣難かしかつたのです。

私は修道院の壁の中で、長い年月、はてなく廣い野原を見たいと、また地上は美しいかどうかを知りたいと、人間は自由のために、それとも牢屋のために生れて來たかを知りたいと、何時も考へて居りました。考へ厭んだ末、たう／＼わたしは或夜雷雨に紛れて逃亡したのでした。その時、修道院の人々は、雷雨を恐れ、皆聖殿のほとりに集つて地に俯伏してゐました。外へ出ると、今まで抑へつけられてゐた内部の力が急に強く漲つて來て、わたしは吹き狂ふ嵐と兄弟のやうに抱き合つたり千切れ飛ぶ・恐しい黒雲を樂しさうに見送つたり、電を手で摑んだりしました。

私は長いこと馳け續けました。何處を馳けてゐるのか、何處へ馳けて行くのかちつとも知らずに、たゞ走り續けました。その夜は何時になつても雲がとれず、見知らぬ行手を、星一つ照しませんでした。が、疲れた胸の中へすが／＼しい森の夜氣を吸ひ込むのは、何よりも快いものでした。

長い間走り續けました。で、到頭疲れはてゝ、高い草の中に横たはつて了ひました。そして耳を澄せば、追手も來ない様子。雷雨は止みました。青白い光が、暗い空と大地との間に、長い縞を見せて伸びてゐる。その上の方に、山々の高い峯が模様のやうに見分けられました。

わたしは身も動かさず、默つて、草の中に横たはつてゐました。時々狼が、何處かの谷間で叫んだり、また赤兒のやうに泣いてゐます。さうかと思ふと、滑かな鱗を光らせながら、蛇が石の間を匍つてゐました。

が、私はちつとも怖がりませんでした。私自身が、野獸のやうに人馴れず、今迄蛇のやうに隱れ住んで來たのですから……

遙か下の方では、雷雨に水嵩増した流れが、轟々と鳴響いてゐる。その鳴響は百人の怒號にも似て、凄まじいものでした。

その中に、霞んだ空の彼方で小鳥が鳴きはじめ、東が金色に明けてきました。微風が露つぽい木の葉をさわめかせば、夢うつゝの花も呼吸しはじめたのです。私も、日を迎へようと頭を擡げて、あたりを見廻しました。すると、私は急に恐ろしく

つたのです。ぞつとするやうな深淵の崖外に、私は横たはつてゐたのです。眞下で、怒濤が逆巻き、咆え狂つてゐる。

しかし、私のまはりには、天國の園にも劣らぬ草原が廣がつてゐました。

草も木も虹色の衣裳を着て、その衣裳には、玉のやうな露が光つてゐました。葡萄の枝は、透くばかりに青い葉を、美しく木々の間に飾り立てゝゐました。枝々には、見事な房がぶら下つてゐて、時々臆病な小鳥の群が舞つて來ました。

わたしはまた、大地に俯伏して、夢のやうに心を誘ふ不思議な聲に聞き入るのでした。

その聲は、叢といふ叢の、葉と葉が、皆天と地の秘密を私語き合つてゐるものゝやうでした。

その朝は空が澄み渡り、もし空高く天使が舞つてゐたならば、その姿を眺める事も出來たでせう！

うす青く、深々と透き通つた空の美しさ、わたしは空を眺めてゐる中に、いつか身も世も忘れてしまひました。

しかし、太陽が高く上れば暑氣も増し、その爲にわたしは我に返りました。すると、苦しいほど、渇を覺えてきました。

やがてわたしは、高い崖の上から流れの方へ、しなやかな灌木に縋りながら、石から石を踏みかへて、やつと下りはじめました。足下から、時々石が砂煙を上げて轉り落ちる。唸りながら、躍りながら落ち下り、はては河波に呑まれてしまふ。

終に、私は、深い流れの上に身を差し伸べました。が、少しも怖くありませんでした。死さへ、私には恐ろしくないやうでした。山水のしぶきが、わたしの顔をすが〳〵しく冷す。わたしは貪るやうに、水へ吸ひ寄りました。

その時、ふと人聲が——輕い足音が聞えました。わたしは愕いて、あわてゝ叢の中へ身體を隱し、怖る怖る眼を上げて、その聲に耳を傾けました。

うら若い、ヂォルヂヤの女の聲でした。だん〳〵近く聞えて來る……何といふ生々した氣取らない聲でしたらう！

それは、唄をうたつてゐるのでした。（未完）

編輯後記

むめお

長い間手傳つてもらつてゐた村山さんの代りに池田みわ子さんが、これから本誌のお守り役になつて下さつた。

村山さんの病氣については、方々のみなさんからお心厚いお見舞を頂いて私までうれしかつた。病氣はもう餘程いゝらしい。すつかり元氣になつたといつていゝでせう。それで村山さんの上には一段と若さが輝いて來たやうに見える。平素ちつとも身なりなぞ構はなかつた人であつたがおひおひと粧ふことの樂しみを知るやうになれば、美しさはまた一段と深い味に滲み出る事であろう。

私に、陰欝な日がつゞいた。青葉の茂りが、時々たまらない程私の眼を刺して、仰いで空をみる事が出來ず、人の顏さへ正視できない程疲れて萎え切つた日がつゞいた。

殆んど性格的にもつてゐる私の此の惡い病氣――ゆううつな厭人病である。

自分自身の生活や不幸な友人たちの生活を通じて知る今の世の中の不正や不合理、個人の努力を以てしてはどうしやうもないこれらの不幸の根源について狂ほしい憤りに怒り立つとき、私はぢつとしてゐられない。殊に、女であるといふそれだけのために、どんなに多くの友人たちが不當な苦しみを脊負はされてゐることか、ぢつと我慢してその苦しみに耐えてゐる女たちが私には腹立だしい位だ。自分勝手な病氣なんか惡魔に喰はれて死んぢまへ、と私は思ふ。

『職業婦人の家』について常にかはらぬお力添へを澤山の讀者からいたゞいてゐることをお禮申上げたい。いろ〳〵とマイナスの仕事を澤山にもつてゐるので短い一日なんかすぐに飛んでしまふものだから、思ふ樣には渉らないが、會つて話しをする程の人が當然有るべくして未だ一つもないさういふ「家」を職業婦人がもつことは必要だと云つて皆さんが熱心に助けて下さる。私共の微力がかういふ社會的に必要な仕事のために活きるといふことは、何よりありがたいことだ。どうぞ、この上ともにどし〳〵募金をつゞけますから助けて下さい。

編輯後記

みわ子

●五月のはじめ、恰度、妹の不幸に會つて、北海道へ歸省中だつた私へ、奥様から、婦人運動の編輯を手傳はないか、とのお話だつた。まだ編輯といふ仕事に不馴れな自分ではあつたが、とに角やらせて頂く事にして、急いで東京へ歸つたのが五日。それから十日たゝぬに思ひがけなく、また弟の訃にあつたりしたので、六月號を休刊にした代り、七月號は、ずつと早く出さうなどゝ云ふ計畫にも、ひどく狂ひを生じて了つて、雜誌の發行をまつて下さる皆様に非常にすまないと思つてゐます。

編輯の方も、今月は例もの二倍も原稿が多く集つたにも係らず、さういふわけでいろ〳〵不都合を生じたり、紙數の都合もあつたりして、思ふやうに載せきれなかつたのが殘念です。

殊に、林芙美子さんの職業受難記の後半を、來月號に廻さねばならなかつたり、丸山さんの飜譯、ムッソリーニを半分しかのせる事が出來なかつたりしたのは、寄稿して下さつた方々にも、讀者の方にも全くすまぬと思ひます。而し、葵いつ子さんの「かくて時代を」のせる事が出來たのは、お互のために大變喜ばしいと思ひます。

●婦人運動の編輯をやると定つてから、なれないせいもあるが始終此事で頭が占領されてゐるやうです。書店へも出し度い頁も殖し度い等々と希ひは、後から〳〵と湧いて來る。皆様の御考へや御注告もどし〳〵云つて頂いて徐々に實現さしてゆかうと思ひます。

此雜誌を、より親しい皆様の雜誌とする爲に、又より正しく、物事をみきわめる鏡とする爲に、かうあり度いとか、斯うあるべきだ、とお思ひの方は、どし〳〵云つてよこして下さい。之は編輯部が皆様へのお願です。

●又これも雜誌についてで何時も思ふ事ですが、ありのまゝの生活を書いたものが欲しい。字の誤りや、文章の違いなど、氣にせずに、農村の婦人は農村に於ける生活を、工場の婦人は、工場の生活を、また、街に働く婦人は、その一日を、ありのまゝに、書いて送つて欲しいと思ふ。それが、この誌上にのるとき、そのものはもうそれを書いた人獨りの聲ではなくて、幾百、幾千の同じ生活をしてゐる人の聲となり、やがて、それがこの社會を動かす原動力ともなる――と思へば、決して、今考へてゐる事を、そのまゝ默つて、押潰して置くべきではないと思ふ。

字が上手だとか、文章がきれいだとかいふ事は、便利には違いないが、之は大した問題ではない。

必要なものは眞實です。眞實を、ありのまゝ下手でも何でも、書連ねてあるもの程、人の心を底深くから動かすものはないと思ふ。この意味で、皆様の生活の姿を是非投稿して頂き度いと思ひます。

◇誌代はすべて前納にして下さい。

前納誌代

壹部	貳拾五錢 （郵税一錢）
半年分	壹圓四十錢
壹年分	貳圓八十錢

送金法

送金は振替が一番便利です。誌代の受取證は別に出しません。雜誌發送を以てこれに代へます。

昭和四年六月三十日納本
昭和四年七月一日發行
東京市牛込區市ヶ谷本村町四
發行編輯兼印刷者　奥むめお
東京市牛込區市ヶ谷本村町四
發行所　職業婦人社
振替東京六四一六〇番


森永ミルクキャラメル
一個 五錢・十錢
健康への
安全地帶
右・危險！菓子に御注意
左・安全！森永に御留意
(一) 原料の精選による美味と滋養
(二) 完全無缺の衛生設備
この二大特徴を有せる本品！
毎日の御愛用は 健康への安全地帶です。
K.35

大正十三年十一月二十二日 第三種郵便物認可
昭和四年六月三十日 印刷納本
昭和四年七月一日發行（毎月一回一日發行）

婦人運動 第七卷 第六號 定價二十五錢



婦人運動 附録版

—奥むめお—

こんにち相當に自覺ある婦人で、婦人會とか婦人團体とかに少しも關係がないといふ人は恐らくないでありませう。さうして婦人會の活動を通して、多少とも現代の社會的動向に沿うて生きてゐる婦人が實に多くなりました。

婦人は元來ものを買ふ生活の主なる擔任者ですが、この買ふ生活を中心にして婦人同志が協力一致するならば、家を外にして活躍せずとも消費者としてのその平凡な日常生活のうちに團体的にも社會的にも相當有力に寄與する道が開けて來ます。

「赤の他人の商人に儲けさせる位なら、屬する團体にそれだけの儲けを積立てませう」といふ心にみんなが成つて、ブローカーや問屋小商人にぼられて來た在來の買ひ方をやめ、各婦人會で必要品の共同購入を初めたならば可なり多額な金子が婦人全体の總和にして見れば浮び上つて來ませう。

ものを買ふ生活の主人であるべき婦人が、買ふもの丶値段の支配者となることが出來ず、常に賣り手の商人に勝手に搾りとられてゐる現状です。婦人の團体である限りどの婦人會でも常にこの消費者としての當面の問題を忘れずに消費組合主義に依る共同購入をそれ／＼の會で行つてゐてほしいと思ひます。現に、會費以上の積立金をこれに依つて得つ丶活動してゐる婦人團体も尠くありません。

小雀のさへずり

佐野すゞさんは新婚の夢まどらかなる半年ぐらゐをすぎてから、背の君にすゝめて△△大學の經濟學專攻部で三年の學究生活をつゞけて勉強をしてお貰ひなさつたのですつて。あの頃の大奮發のおかげで、今でも二人が始終婦人問題や社會問題を話し合ふので教へられることが隨分あります、とのこと。但、やがて銀婚式も來るだらう程の古女房で元氣な職業婦人であります

×

「わたしこの頃忙しいのよ」と赤松（明子）さんが云ひ出すとみんな、そら又初まつたよ、とケイビツしてしまいなさいます、皆さんに云はせると、子供があるわけでなし、勤めがあるわけでなし、お姑があるわけでない……だから、もつと／＼仕事を一杯背負ひこませて社會に御奉公させてやらなきあなんですつてさ。

「病氣なんかする人は、からだにも心にもスキがあるからだ。ほんとに忙しく張りつめてゐたら病のおそふひまがない筈です、と云ひ／＼してゐて自分が病氣をするとはこれ如何に」と奥さんにお伺ひを立てたら

「彼奴、ちつと靜養しなければ不可ないが、と思つてもあの女は中々人の云ふことを聞くやうな女ぢやないから、仮りに病氣を與へて休ませてやれ、と天の神樣の思召しで公休を貰つたのですわ。」とどこまでも減らず口。

英國の總選擧と婦人

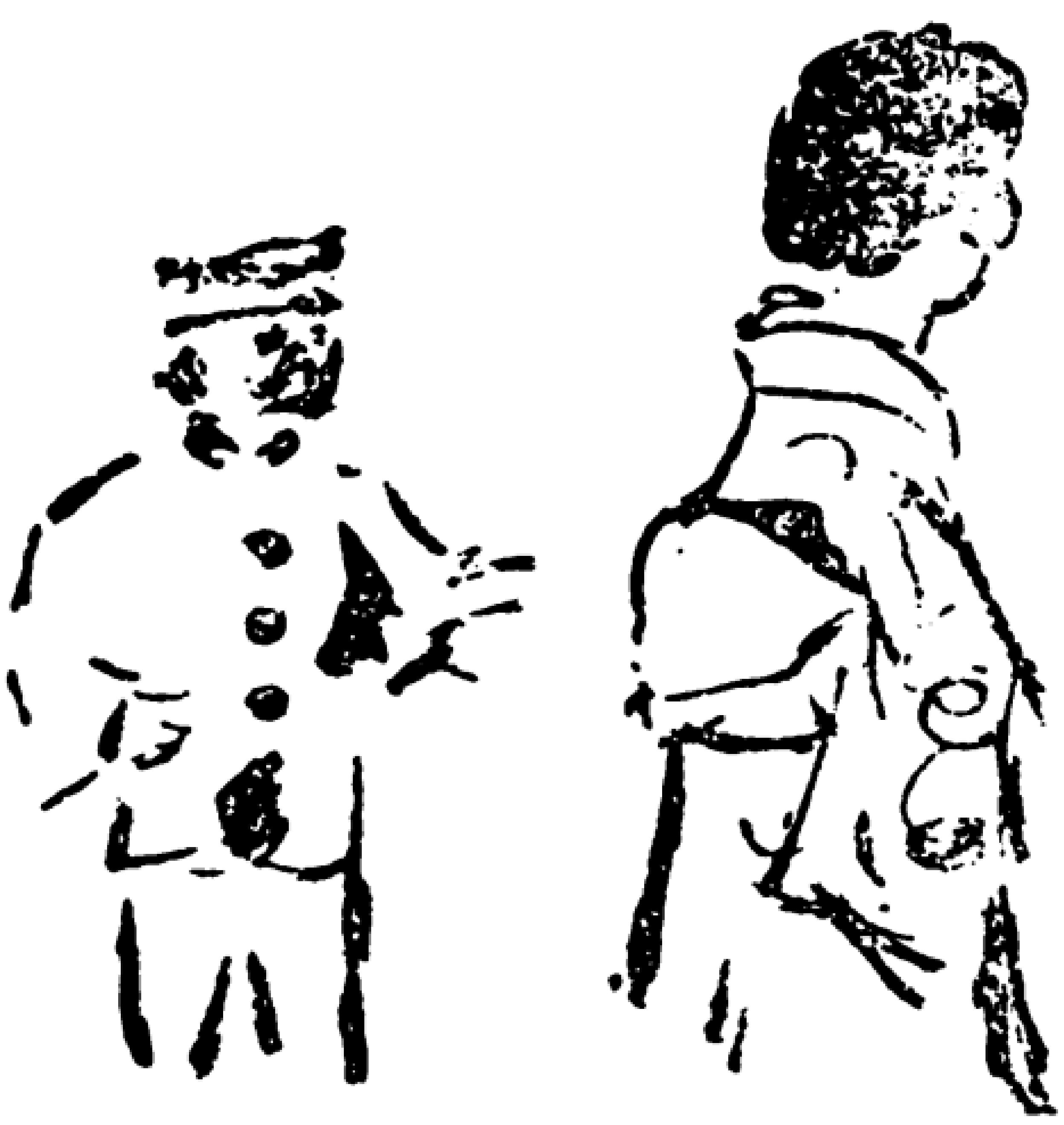
先頃行はれた英國の總選擧は、新らしく婦人の有權者が五百五萬人も加はる事になりましたので世間から非常に興味を以て見られました。英國では一九一八年の選擧法改正で、すでに八百萬人と云ふ婦人の有權者を持つて居りましたが、それには三十才以上の婦人と云ふ制限がありましたので、去年その制限がとれて男と全く同じやうに二十一歳以上と云ふ事になつたのであります。それで今度の總選擧には婦人有權者が千四百四十萬人になつて、男子の有權者よりも、百二十萬人も多かつたのです。

自由、保守、勞働の三大政黨はそれ〴〵婦人の候補者をたて、その數は七十幾人に

結婚には健康診斷書

結婚するときには、お互ひにどんなに信じ愛ひし合つてゐる間柄でも、たしかな醫者の健康診斷書を交換することを第一條件にしませう。

第一であるべき健康の問題が、とかく人生のこの重大機にあたつて無視され勝ちなのはまことに嘆はしいことではありませんか。殊に、花柳病をもつてゐる男子との結婚を避けることは絕對條件です。女の不用意と無知が、いつも女自身を底知れぬ不幸につきおとしてゐる事を知つて下さい。必ず健康診斷書を見せ合ひませう



うすものゝ女の着物に
お巡りさんの眼が光り出した……

友のたより

田邊一子氏――（東京より）

（前略）二月初めから腎臓を患つてふせつてゐますが平素も右足がわるくてゐますため今はどうすることも出來ず醫者の命を守つて絕對安靜としてゐます。

婦人運動で拜見いたします御論旨はいつもくり返し拜讀し云ひしれぬ力强さを感じてゐます正直の處私は、いまの女流歌人などの仰言る事にはいさゝかの關心ももつ事が出來ないのでございます。御誌や、その他いろんな無產派の文藝雜誌に多大の關心をつねにもつてむさぼり讀んでゐます。叫べど、叫べど、通じない感がございますね（以下略）

進藤留藏氏――（新潟より）

貴社の活動振りに贊成し、かげながら繁榮を祈つてゐます。農村でコツ〳〵働いてゐる無產處女の中にも有望なゝ娘が澤山あります。彼女らに貴誌を送りたい心から財布の底をはたいて切手に代えました。

婦人運動の五月號をすぐお送り下さい。私の誌代もいろ〳〵都合惡く送金いたしかねてゐますが、何れ財布の工合を見て送る。

農村の指導者なき婦人の友になつてやつて下さい。

繁田四郎氏――（埼玉より）

過日の消費組合についての御講話は感深く拜聽しました。私の方でも久し間の懸案ですがその域に未だ達せず殘念です。つきましては消費

達しました。
總選擧の結果勞働黨の大勝利になりましたが、婦人候補のうち見事に當選したのは十三名です。これを黨派別にしますと、勞働黨九名、保守黨三名、自由黨一名であります。

この中でよく世間に知られてゐる代表的な人を黨派別に擧げますと、勞働黨には前勞働黨次官のマーガレット●ボンドフィールド孃、勞働黨の婦人部長で著述家として知られてゐるマリオン●フイリップス博士等があり、保守黨では、現文部次官のアゾール公爵夫人、英國最古の婦人議員、アスター子爵夫人、自由黨からは同黨の黨首ロイド●ヂョーヂの愛孃で其の懐刀と云はれてゐるメガン●ロイド●ヂョーヂ孃が出てゐます。

其後成立した勞働黨内閣には、ボンドフィールド孃が勞働大臣になつてゐます。婦



夏になつて女の洋服が目立つて多くなつた……

結婚難の時代

大學や專門學校を出た男子の結婚觀を聞くと大体次の二通りになるやうです。

一、氣だてがよくて丈夫な女だつたらキリヨウは二の次ぎにしても、共稼ぎしてゆきませうといふ覺悟の女がほしい。

二、は、家位建てゝくれる様な親爺をもつた娘でないと厭だね。暮し向きにおはれて必要なつき合ひも出來ず、研究も出來ないやうなことぢやあから世智辛くなつては、全くさきに行つて運が開ける望みがないからね、といふもの。

功利的打算的な男子に對して敢然と強く生きてゆく覺悟がこれからの女には必要！

組合設立についての規約、又は田舍で行はれつゝある消費組合の實際の側について、參考になるものを成べく澤上よませて下さい。ぜひお巡り下さい。

又、その節の御講話の學校消費組合を實行してゐる町はどこですか。お知らせ下さい少く共學校の生徒の文房具の組合はぜひ實行したいのですが、信用ある生產工場や取引先きが不明で困つてゐるのです。

吉　河　友　惠氏——(三重)

……(前略)かうして農村が實際に窮迫してゆきますと、修養團講師などの抽象的な訓話は馬鹿々々しくて聞いてゐられぬ様ないら〳〵した氣持になつて來るのです。

ほんとに女に、世の中を見る目を與へてやつて下さい。べに白粉で遊び暮してゐる時勢ではないのに、何と若い人たちは無氣力なことでせう。前月號編輯だよりの中の御感想に全く同感でございました。やがてまた、充實したお話を承る日が來ます、うれしくて〳〵。

長　沼　朝　子氏——(福島より)

御ぶさたしてゐましてお許し下さい。

私の家では春蠶が昨日までに上簇して、秋蠶までに一ケ月位の間があります。東北もすつかり夏らしくなりました。蛙が、朝から晩までガア〳〵啼いて、カッコー鳥もさも呑氣さうに氣だるく飛びまわつては、桐の木々にとまつたりしてゐます。

去る二十三日の嵐では、桑畑が散々になりました。

(五頁へ續く)

職業婦人に就て

平塚らいてう

知識婦人の大部分は、婦人の人格的自由や獨立は、經濟的獨立をその基礎的條件としてはじめて確保されるといふ幻影に導かれ、みづから好んで職業生活へ、社會生活へと進出し、教員、記者、官公吏、事務員、社會事業家、社會教育家、社會運動家女醫、著述家、女優、藝術家等々の知的勞働婦人の一群が社會的新存在として出現しました。もつとも是等の知的勞働婦人を日と共にかうも多數に出現せしめたのにはいはゆる獨立思想と共に、否その奥に、もつと根柢的な社會原因として資本主義經濟組織の發展過程に於ける中產階級の經濟事情の變化といふ社會的現實のあつことは言ふまでもないことでありますが、しかし是等の知的獨立婦人は、いづれも封建的家族制度を向ふにまわし、個人主義のために闘つた大小のノラであつて、その心は新生活に對する輝かしい夢と、誇りとでみたされてゐました。

しかし扉の外に、街頭に、自由をもつ人間としての第一歩を踏み出した是等のノラ達はその職業生活に於て、社會生活に於て、――彼女たちの多くはむろん俸給生活者でありました――何を見、何を學び、何を得たでありませう。彼女等の久しい夢であつた婦人の人格的自由、思想の獨立が果してそこにあつたでせうか。否々。

なる程自分自身の働きによつて、自ら衣食するといふことに多少の個人的滿足はあつたに相違ありません。又かういふ個人的な意味での、言ひかへれば父又は夫といふ一人の男性に寄食してゐないといふだけの意味での經濟的獨立なら、そこに得られたに相違ありません。しかし彼女らはかうして人間としての自分自身を社會的に確立しつゝあるのだと思つてゐたとき、もう既に今迄とは別な他の支配の下につながれてゐたのでありました。すなはち彼女等は言ふまでもなく社會的には被支配階級に屬する一個の雇傭者であつたのです。たとへそれが頭腦勞働であれ何であれ、およそ無產にして、勞働によつて衣食する限り、――(彼女等は教育を受けることが出來ただけの經濟的餘裕ある中產階級に生れ、さうして成長したのではあつても、所謂經濟的獨立後の彼女自身は無產者である上に、彼女等を生んだ中產階級それ自身も經濟的には漸次無產階級となりつゝあるのでした)――結局やはり支配され服從させられるより外なく、若し支配的地位にあるものに對し、腹臓なき意見を述べたり批評がましいことを言つたり、時に反抗でもしやうものなら、それこそ忽ち危險思想!危險人物!といふことで、いつその地位を失はねばならぬかも知れず、又それほどでなくとも、常に自分を僞り、妥協していくのでなければ社會的成功は望み難く、その上こゝでも又性的差別待遇によつて、女子であるが爲めばかりに同じく働いて、同じく酬いられず、且つ昇進にも制限があるといふやうな、とかく不安な、さうして不利な自分の地位を彼女等は發見しない譯にはいきません。

▲問答欄▼

【問】何にもわからない者ですが、婦人問題に關する一と通りの知識を持ちたいと思ひます。どんな書物を讀んだらいゝでせうか、敎へて下さい。（兵庫樺嶋八千代）（東京S子、倉田ちか）

【答】かういふ質問を屢々うけるのですが、初學的な讀み物であんまり揃つてゐないので、自分たちの手でぜひ一通り纏めて出版したいと思つてゐます。

一体、婦人問題だけを一つ切り離して研究しやうとすることはムリであつて、ぜひ一般社會問題と結びつけてそこに婦人問題研究の考察を進めてゆかなければならぬと思ひます、そして心理上からも、法律上からも教育上からも、經濟（及び職業）上からも、生理上からも、又兩性問題からもといふ風に各方面に研究を進めてゆようし、。

婦人論（ベーベル原著 山川菊榮譯）
婦人問題十六講（奧むめお著）
婦人問題十講（本間久雄著）
婦人問題（永井亨著）
家族制度の研究（河田嗣郎著）
婚姻史（穗積重遠著）
日本閨門史（白柳秀湖著）
兩性問題大觀（島村民藏著）
婦人と法律（片山哲著）
無産階級の婦人運動（山川菊榮著）
人間結婚史（ウエスターマーク原著 島村民藏譯）
女性中心說（ウォード原著 堺、山川共譯）
婦人の社會的地位（ラッポート原著 山川菊榮譯）
戀愛と結婚（エレン・ケイ原著 本間久雄譯）
母性の復興（エレン・ケイ原著 平塚らいてう譯）
男子と女子（ハヴロック・エリス原著 某氏譯）
婦人と社會主義（バーナード・ショウ原著 加藤朝鳥譯）

文學的に婦人問題を取扱つた問題小說も澤山ありまして、この方面からも余程婦人の自覺と足したものが多うございます。

（三頁より續く）

——あなたのことが妙に氣がゝりでゐます。この頃どうしてゐるかの悉しい消息が聞きたい譯者はつゞけてゐますか。若いうちです。元氣にお生きなさい（奧）

吉川千鶴子氏——（北海道より）

「家」が建つたらぜひ、私のやうな者でも働かせて頂きたいと思つてゐますが、どういふ組織になつてゐるのでせうか。給料も要りません。食費だつて自分で支辨が出來ます。私も、北海道のこの土地へさういふ婦人のための家を建てゝ自分の畢生の仕事としたいので見習ひがしたいのです。

奧さんの思召しの樣に大阪にも、ナゴヤにも北海道にも、どこにも彼處にもさういふ家を作つて婦人運動の源泉地たらしめ、又、一般の婦人の力強い阯ともなりたいものでございます。

或る有名婦人の家の女中——（東京より）

うちの奧樣はけふもお出かけ、婦人會ではどれだけおエライのか私共下賤の者にはわかりませんが、かういふ野心家が、そして虛榮心の强い人が婦人會の有名者だと思ふと私は、いまの婦人會にあいそがつきます、うちの經濟なんて丸で考へにない樣ですが、あれでも婦人會では立派にお働きなさるのでせうが、私共のためにはお菓を一度だつてまともに下さつたことがない。每日人の余りものばかりとは有名婦人の家にあこがれて出て來た自分の愚かさの前に自分乍らに借しすぎます。每日、人樣のお噂がお客樣との間に交はされるので、それをきいてゐるのだけが私に面白うございます。



職業婦人の家

募金報告

（5）

在家松治、　在家イトシ、　服部豊雄、　白石安喜、　山吹小學校母の會、(三〇)　廣井レツ子、(五)　田原美榮、　安部世意治、　土井勝子、　小林しげ、　園田市子、　味村實、　藤木はる(三)　山本セイ、　無名(三)　宮本ハナ(二、五)　小林かねよ、　宮城愛子、　金成みき江、　渡邊きね、　小林かつ代、　山尾しげ子、　山内ふき子(五)　秋澤定吉(二、五)　關根菊枝(二、五)　上田きよ子、　山本寛治、(二、五)　母友社(二、五)　馬島僩(二、五)　太平眞佐子(一、五)　吉田きよ子(一、五)　林ナ(二、五)　村上藤策、　厚品、　村田千代子(二)　夏目眞佐惠、　岡本さと子、　鵜飼百代子、　鵜飼英子、　菅原藤江、　岡本絹枝　加藤多、　西山年子(二)　加藤秋子、　水谷信子、　河合春江(三)　加藤朝子、　飯島春子、　松本繁枝、　前田綾子、　池田まちよ(一、五)　小澤育子、　武澤擴子、　古賀鈴惠、　神崎秀子、　千早豊子、　前敏田子、　小澤房子、　中村りき子、　兼田ミエ子、　渡邊儀一郎、　庄司茂雄、　國元綱三郎、　松本廣、　植村アキヨ、　能見ツヤ子、　小出よしゑ、　岩崎文　中山ひな、　厚長子、　新村サク、　永松松枝　金野千代子、　山口のぶ子、　弦卷好子、　荒井廣治、　茂木榮三郎、　高橋松江、　清水辰夫、　吉原光惠、　奧平やゑ、　細野初江、　海老澤あい子(一、五)　福羅とみ、　山本定次郎、　杉山ヒデ、　飯田多代子、　岸伊代、　前原喜美子(二)　石井富美江、　弦卷利雄、　武田やい、　大柴秀子、　佐々木芳子、　田中信乃、　相田キヨ子、　中井佐登子、　福田敏子、　森米子、　穗苅志津子、　土屋とみ子、　町田かつ子、　中村はな、　近藤幸子、　佐々木誠三、　田中虎之助、　吉澤平藏、　後藤むつ子、　大熊富子、　磯崎まつ、　山本幸、　井川壽子、　濱崎勇、　佐藤法順、　熱田綠、　梶野秀子、　里村專乘、　秋山ムラ、　西田昌俊、　小林幸次郎、　平尾文子、　末永千代子　官井曉子、　櫻井節、　小川秀子、　高野友子　万代正枝、　關根セイ、　札場房子、　遠山君　岩井富美子、　高橋武子、　菊池芳江、　大野馬子、　三輪秀子、　常盤シフ、(五)　高橋幸子(五)　兒玉琴枝、　小林源太郎(〇、五)　嶺村桃源(五)　與謝野晶子、(五)　尺秀三郎、(五)　濵井たに、(三)　雄谷清子(二)　金子光子(二、五)　深尾文子(五)　時岡(五)　某氏、　濱野正一郎、　細野長次、　許斐武信(二)　大木商店出張店、　寺澤なを江、　音羽屋、　大澤キヨ　毛利、　井口忠彥、　小泉太七、　田中、　近田雪子、　海老澤喜作、　川上つね、　無名氏　大久保健治郎、　土田駒吉、　葉山令二、　堀

江、須長、常盤すし、川島、小川小三郎、小川哲路、篠原、鈴木ゆき、森しげ、大熊誠一、奥平、各務まち、飯塚モト、無名氏、濱野伊之助、田島章、大塚、荒井福松、みのるや、藤村源三郎、小川平次郎、中島、柘植正弘、成瀬すゞ子、田中つね、高須光太郎、大連しげ、戸澤ちよの、吉富丈吉、片山、島越鎌藏、伊豆下田看護婦會（一〇）小野悦子（五）靜岡縣立下田高女職員一同（一〇）下田小學校長（五）稲生澤小學校男教員一同（七）久我谷喜代、濱田琴枝、渡邊さん、山下まつ、臼井とみ江、土屋こう、小山とく、渡邊ふさ、鈴木しち、竹岡彌生、池野采香子岩瀬商店、小澤松江、武藏野病院內齋藤喜久、同田村直江、宮地登志惠、熊本まき望月いし子、藤本たけ、小林春子、白銀みつの、直澤キク、丸山とりゐ、宮入竹代、洞いさみ、篠崎あや、中島チエ、西村キミエ、稲山とめ、佐藤とく、山川とみ、多々良豊子、江原はる、遠藤花枝、菅松崎まちゑ、高木タメ子、林千代子、菅原梅子、松岡みたよ、綾千代子、上岡春美、藤原さと子、福崎タツ、小林久子、日本濱田アサノ、福井さの、小野濟子、日本動産火災內、長戸綠枝、同松浪靜子、志氷はつ子、須田トリ、大沼シン、池田喜代、春日トミ、猿田靜子、北條キヨ、後藤淺野正子、近谷つる、鶴岡ハツ子、後藤靜子、加藤きん、大岡つや、大野と志、篠原千山內リン、山村絹江、小原兼雄、篠原千代、武妙子（十五）有崎速子（三〇）小川なを（一〇）野崎綏子（一〇）井田キンエ（三）向荻野すゞ子（二）杉本（五）鈴木芳惠（五）向井英子（五）九段郵便局內有志（五）鈴木ヤイ（五）長崎はな（五）高橋チカ（五）小林スギ（五）齋森保（五）（以下次號）

先月會報飯も休會したものですから、募金の御報告が澤山にたまりました。あと來月號にのせますから惡しからず。一萬圓といふ金子をまとめるのが中々手間取つてゐますが、でも、追かけ〱募金袋に金子を充たしては届けて下さるので、ほんとに力强いことに思つてをります。引續きどうぞお願ひします。（奥）



◉婦人消費組合協會◉

七月の第一土曜日は、全世界の消費組合が示威運動の日として盛んな る催しをして組合運動の宣傳をします。家庭の主婦として、消費者として今日の物價の不安定、生活難、商人の飽くことなき不正行爲等に對して私たち婦人は未だ何ら有力な働きが出來ないでゐる事は口惜しいことですね。

婦人消費組合協會のやうな趣旨の婦人婦人の會を各市各町各村に作つて提携しませう。

いよ〳〵會報發行の手順がつきました。地方の婦人團体で主婦の實際問題を扱つたり消費者としての立場からする仕事をなさつてゐる處はどし〳〵ニュースを送つて下さい。各方面の記事を滿載します。

消費組合の精神をひろめるために日用品を取扱ふことにしました。悉しくは會報でみてほしいですが、地方の婦人會と東京のものとが有無相通じて協力したいものです參加して下さい。

消費組合運動についてもつと知りたい方のために適當な參考書を取揃へてあります。

◉職業婦人協會

サラリーマンの勤務時間がまち〳〵であるのは不可ないといふので內務省で對策協議中であります。女であるといふ弱味のため職業婦人は殊にいろ〳〵と割の悪い立場におかれてゐます。

職業婦人として實感から出る要求を社會に聲明し、無自覺な仲間を呼びさましてゆかねばなりません。もう、私達の職業生活がお嫁入りまでのお小使ひ稼ぎ位なノンキなものでなくなつてゐます。結婚難、生活難も手傳つて、多くの女にとつて職業をもつことは避けられぬ事情になつて來つゝあるのですから、大いに職業的地位を高めるために起ち上りませう。

薄給な職業婦人のために、實費で——然し極めて親切に診察して下さり、病氣の相談健康の相談を受けて下さるお醫者樣への會員診察券が出來ました。有効に利用して下さい。

會員のためにも會員以外の申込のためにも職業相談部の仕事のこの頃忙しいこと。ひどい不景氣ですね。

十月例會は——十一日（第二木曜日）
會場神田一ツ橋の教育會館
赤松克麿氏の講義、映畫、懇談。



これが皆さんのお手許に届くころには、ボーナスで財布がふくれてホクホクの人も澤山ありませう。月末のやりくりに背筋を立てゝゐるお母さんもありませう。農村では忙しくて、雜誌をよんでゐるヒマなんかありあしませんと云はれる頃かも知れませんね。職業婦人社では盆も暮もない。月末もボーナスもない忙しい仕事のうちに緊張して働くばかり。ほんとの熱殺、忙殺です。

一方にはスポーツが盛んですけれど、一方では女の健康がこの頃よろしくないさうです。忙しすぎる女。薄給で無理をしてゐる職業婦人、子供を生みすぎる母さん、粗食偏食におち入り易い農村の人々！からだばかりがしんせうの無産者は、まづ健康第一御用心肝要でございます

大[illegible]　昭和四年六月[illegible]日印刷納本　昭和四年七月一日發行　第三種郵便物認可　「婦人運動」第七卷第六號（附錄）　東京市牛込區[illegible]村町四　職業婦人社發行